

# 戦後祇園祭認識の変遷 ——月刊『京都』、絵本『火の笛』から考える

鈴木 耕太郎

(立命館大学大学院文学研究科博士後期課程)

谷本 由美

(大阪教育福祉専門学校特任教員)

## はじめに

山鉦巡行は(中略)祭というベールを被りながら、あの美しいゴブラン織やベルシャ毛氈、唐錦織などの数々は、平和な貿易を求めてやまない文字なきプラカードであったし、災厄よけのチマキ撒きは、疫病のみならず戦乱や弾圧を払いのけようという民衆の願いをこめた痛烈かつ風雅なドラまきではなかったか。

(中略)わたしは、いつの日にか日本の平和行進が、それにふさわしい民主的な政府をもったとき、この京都では祇園祭の山と巡行そのものを、わたしたち自身の平和行進鉦として、伝統と未来とを合体させた日本一の行事にしてみたいものだ、秘かに希望したりするのである。

注：傍線部筆者、以下同じ

(西口克己「小説と祇園祭——へそまがりの私見——」『京都』268号、1973.7)

1961年2月、作家・西口克己は中央公論社から小説『祇園祭』を発刊した。天文2年(1533)の京を舞台にしたこの小説では、祇園祭の山鉦巡行は乱世により荒みきった京に住む「町衆」にとっての希望として、また荒んだ京を作り上げた幕府や武士階級の人間に対する「町衆」の抵抗の証として描かれている。それは、現在の祇園祭とはまるで異なるもののように見えるが、むしろ西口は、自身が小説の中で描いたこの祇園祭に普遍性に近いものを感じていたとみえ、いつかは祇園祭の山鉦巡行を「わたしたち自身の平和行進」にしたいとまで言っているのである。

この西口の記した小説『祇園祭』には、原型がある。1952年4月に、当時の立命館大学や京都大学の学生・院生たちが主体となって作成した紙芝居『祇園祭』で

ある。また、小説『祇園祭』を原作にした映画も制作された。1968年11月に公開された、中村錦之助(後の萬屋錦之介)主演の映画『祇園祭』である。

これら紙芝居、小説、映画の『祇園祭』については、既に先行研究によって、制作過程の経緯やその影響などが詳らかにされつつある<sup>(1)</sup>。その結果、時代により移り変わる祇園祭をめぐる認識(正確には祇園祭の山鉦巡行をめぐる認識)をそれらの作品群が如実にあらわしていることがわかってきた。

祇園祭は長い歴史と伝統を誇るが、その歴史や伝統は時代に合わせ常に「変化」し続けてきた結果といえよう。2014年の大船鉦復活や合同巡行の廃止——前祭・後祭の復活など、大きな話題となったものから、小さなものまで常に変化し続けてきたことは別表2にも示した通りである。

本稿では、アジア・太平洋戦争後の祇園祭、とりわけ山鉦巡行をめぐる人々の認識に焦点を当てたい。つまり、主に京都の人々が祇園祭、山鉦巡行をどう見ていたか、あるいはそれらをどのようなものと考え、何を求めていたか、を見ていくものである。それは、祇園祭や山鉦巡行の歴史的意義を明らかにするだけでなく、人々の認識を通して戦後の京都という空間がどのような場であったかを明らかにすることにも繋がると考えている。

ただし、一言に人々の認識といっても、その対象範囲は広大であり、アプローチの仕方も様々ある。そこで本稿第I部では、白川書院刊行の月刊誌『京都』(現在は『月刊京都』に改称)における1950年(創刊時)から主に70年代までの祇園祭、山鉦巡行認識を幅広く抽出し、見ていくこととする。詩人・白井喜之介が「京都の公器的役割」を目指し、京都市観光局や京都の有力者の協力を得て刊行したこの雑誌<sup>(2)</sup>は、今日に至るまで京都の文化や歴史、観光など様々な情報を全国に発信し続けている。

ただ、同誌は創刊当初より京都にゆかりのある知識

人、文化人が書き手の中心であるため、そこから抽出される認識がイコール京都の人々の認識であったとは言い切れない。しかし、学術誌ではなく、あくまで京都の総合的な情報誌として、創刊以来、一貫して京都に根差しており、その時々をめぐり、その影響が直接記事に反映されるという特徴が同誌にはある。そのような点を踏まえ考察対象とした。

そして第Ⅱ部では視点を特定の作品に絞り、そこから浮かび上がる祇園祭、山鉾巡行認識を検討したい。検討対象は80年代に入って作成された絵本『火の笛』である。この作品は80年代に入ってからも紙芝居以降の流れを汲んだ祇園祭認識を継承している点で注目される。以下、本論に入りたい<sup>(3)</sup>。

## 第Ⅰ部 月刊誌『京都』から見る戦後祇園祭認識の変遷

### 第1節 民衆の祭りとしての山鉾巡行

先述した、紙芝居、小説、映画『祇園祭』において、とりわけ象徴的なのは、祇園祭の山鉾巡行は民衆（各作品とも「町衆」という。詳細後述）が主体の祭りとして描かれ、また民衆の祭りであることの由来を語ろうとしている点であろう。

史料上の限界もあるが、山鉾の原型と思われるものは鎌倉末、元亨元年（1321）の史料で確認できるとい、南北朝期に入ると本格的な山鉾を確認できる<sup>(4)</sup>。ただし、民衆が山鉾の担い手として確立されたのは永正8年（1511）から紙芝居、小説、映画の舞台ともなった天文2年までの間だという<sup>(5)</sup>。民衆主体の山鉾巡行が天文2年に始まったとするのはフィクションにしても、その時代には民衆主体の祭礼行事となっていたといえよう。

もちろん、このような認識は何も紙芝居だけに現れているわけではない。『京都』（なお、1954年1月から1969年5月まで『東京と京都』に改称）誌上にも以下のような記事が見られる。

八坂神社の祇園祭は二つの行事になつている。一般に祇園祭と云ふと、あの豪華絢爛たる山鉾の巡行だと思つている人が多い。（中略）

神輿渡御は云う迄もなく神社の祭りで、宮司以下の神職が扈從している。これは正に八坂神社の祭礼である。處が十七日も廿四日も午前中の山鉾巡行は神社に直接関係がなく、氏子等のみで神いさめの祇園囃子を賑やかに美事な織物や彫刻に飾

られた山鉾が巡行して疫病の流行せない様に、災難がない様に祈念する祭で、初めから終り迄、一人も神社の人々は奉供せない。神職のいない大衆だけがやつている祭である。

（田中緑紅「京の祇園祭」『東京と京都』7号（通巻44号）、1954.7）

戦前から郷土史家として活躍してきた田中は、祇園祭の神輿渡御と山鉾巡行を「二つの行事」として並列関係で語り、「神職のいない」祭りというのが山鉾巡行の特徴であるとしている。ただし、同号に掲載された和田敏の記事からは、田中の記事とは微妙なニュアンスの違いが読み取れる。

（前略）祇園祭はギオンエと云い、日本三大随一の夏祭りで、俗に天王祭や屏風祭の別名もある。而し、鉾は町家の行事であつて神輿がシンボルであるのに、履違へて居る人が多いと思う。

（中略）神輿の事に関知せずして山鉾だけが祭礼と思ふ人が昔も多かつたのであろう。十七日の朝の間は山鉾巡行が（半数で後の半分は二十四日に巡行）あり、夕暮からは渡御祭である。

（和田敏「祇園会」『東京と京都』7号（通巻44号）、1954.7）

和田の記事にも「祇園祭＝山鉾巡行」という認識が当時から多くの人に広まっていたことがわかる。しかし、その認識について和田は「履違へて居る」とし、「鉾は町家の行事」であり、祇園祭は「神輿がシンボル」とであると述べる。つまり、神輿渡御に祭礼の本義を見出しているのだ。

それでは、八坂神社の認識はどうだったのか。当時、八坂神社の宮司であった高原美忠は

高原 それから祇園祭の特色は、神社が主体にならず、氏子たちが主体になって、つづけてきたということですね。たくさんの山や鉾は、神社のものでなく、みんな氏子たち鉾町のものです。

（座談会「祇園祭を語る」『東京と京都』77号・通巻114号、1960.7）

と祇園祭が民衆主体の祭りであることを認めている。

祇園祭の本義は神輿渡御か山鉾巡行か、あるいは並立関係であるのか、それらの視点もやはり各自の祇園祭認識によるところが大きい。ただ、本義の問題とは

別にして、山鉾巡行が民衆主体の祭礼行事であることは誰もが認識していたようである。

そしてまた、山鉾巡行が民衆主体の祭礼行事であるという認識から、さらに2つの祇園祭（山鉾巡行）認識が「派生」することになる。1つが冒頭で触れた、「権力に抵抗する民衆の祭り」という認識であり、そしてもう1つが「民衆が楽しむべき祭り」という認識である。とりわけ『京都』誌上では後者のような祇園祭認識が、50年代から見られるようになる。例として、編集部が記したと思われる以下の記事を見てみよう。

（前略）戦後二十二年に復活、一昨年からは御池通を通るようになり、巡行路についてもめたりしていたが、その起源をみると、御池通の神泉苑にいつた記録もあるのだし、大体祭なんていうものは、時代々々によつて次第に変わつてゆくのがあたりまえで、ここでも不易と流行の古事の如く、いろ／＼変わつていつてよいと思う。祭は人民のショウであり、皆が見てたのしめるようにするのがよろしい。

（祇園祭）『東京と京都』54号（通巻91号）、1958年7月）

この祭りとは山鉾巡行のことであろう。主体はあくまで「人民」ではあるが、それは神事ではなく「ショウ」、すなわち見て楽しむイベント化されたものとの認識が見て取れる。

一方で以下のような記事もある。

（前略）祇園祭そのものが益々見るものとしてウエイトを増大し、殆ど一〇〇%観賞の爲の催しになると共に、年々新工夫が生れて来て、徐々に變貌の度を加えて行くことは誰も否めないであろうし、又防ぎされるものでない。只、この間もあつてジャーナリストがあちらこちらの論議を採り上げ、巷の話題を賑かにするであろうことは慥かである。

指定無形文化財の前途、それは文化観光都市の將來と共に、王城の地一千年の舊都一京都にとつて大きな問題ではないでしょうか。

（山田兼也「祇園まつり」『東京と京都』42号（通巻79号）、1957年7月）

ここでも祇園祭（山鉾巡行）が「殆ど一〇〇%観賞の爲の催し」になってきていることを明示しているが、それは「誰も否めない」ものであり「防ぎされる」も

のでもない、との見解を示している。一方でそのような在り方が議論を呼ぶようになること、そしてそれが「京都にとって大きな問題」であることを提起しており、先に見た「人民のショウ」であることに対して、全面肯定しているわけではない点に注意が必要である。

ところで、この山田の記事には「この間もあつてジャーナリストがあちらこちらの議論を採り上げ」とある。実は、この「議論」こそ、「ショウ」としての山鉾巡行といった認識が受容される契機となるものであった。

## 第2節 「信仰」と「観光」の二項対立——1956年前祭巡行路変更までの議論

1956年2月、祇園会山鉾連合会（現・祇園祭山鉾連合会）は臨時総会を開き、山鉾巡行の前祭巡行路変更を満場一致で決めた<sup>(6)</sup>。この前祭巡行路変更の決め手は、従来の巡行路である松原通は狭く観光客が押し寄せることで不慮の事故が起きかねないこと、さらに多くの観光客が山鉾の様子を見られなくなってしまうことにあった。換言すれば、「観光客」のための変更だったといえよう。この変更については、京都市側から山鉾町ならびに八坂神社に対し積極的に呼びかけられたもので、変更の前年である1955年には各種マスコミを媒体として、京都の世論を割るような議論に発展した。前節で見た山田の「ジャーナリスト」が「論議を採り上げ」ていたとは、まさにこのときの議論のことである。

当時、京都市では1950年2月より市長となった高山義三のもと、本格的な観光都市政策が打ち出されていた。高山就任直後の同年7月の祇園祭では、戦後初めて後祭が復活し、さらに山鉾町を財政的に支援する祇園会山鉾巡行協賛会（後の祇園祭協賛会）が設立されるなど、大きな転換点となった。また高山市政の積極的な働きかけもあり、その2年後の1952年に祇園祭は国の無形文化財へと指定されている<sup>(7)</sup>。以下、別表2で確認できるとおり、50年代の京都では積極的な観光政策が取られ、それが一定の成果を生むことで、さらなる観光政策が打ち出されていったのである。『京都』もそのような時代に、京都市観光局などの協力のもと、刊行された。

当然、ここには戦後復興をいち早く成し遂げるための戦略が認められ、事実、市民は祇園祭が賑やかになることで復興の兆しを感じ取る傾向もあったようである<sup>(8)</sup>。先にあげた京都市による前祭巡行路変更の要求

は、このような行政側の政策が背後にあった<sup>(9)</sup>。しかし、山鉾巡行を神事の一環と見なす八坂神社は、巡行路は千年続く「神の道」<sup>(10)</sup>であるため勝手な解釈での変更は認められないと反対の意思を明らかにし、松原通住民なども反対の声をあげた。ここに山鉾巡行——あるいは祇園祭そのものが——「観光」資源であるのか、「信仰」のための神事であるのか、といった二項対立的な議論が沸き起こったのである。

ただし、祇園祭の山鉾巡行をめぐる「観光」・「信仰」の議論は、それ以前から度々議論の俎上にはのぼっていたようだ。京都市人事課長や京都市観光局長などを歴任した宮本正雄が1971年7月に、戦後直後(1947年)の祇園祭について回顧した記事を見てみよう。

(前略) 昭和二十二年、祇園祭は復活した。

(中略) が、しかし、ことがこれまでに運ぶには、多くの人々の苦勞の堆積のあったことを覚えておかねばなるまい。

祇園祭の山鉾巡行を「神事」とみるか「観光行事」とみるか、という考え方の問題は侃侃諤諤世論を沸かせた。

(中略) 便法として一応「観光行事」と割り切り、進駐軍当局の諒解をとりつけ、行政もまた、観光行政という面からの<sup>てこ</sup>梃入れをする、という恰好に持っていかざるをえないではないか、ということで着けたものの、さて実施となると多くの批判と抵抗を受けた。当時、二基の鉾だけより建たなかったのも、経済的な理由もさることながら、むしろ「神事」に固執した結果ともみられた。

(中略) 結局、神社側は「神事」として催行すると考える、われわれは「観光行事」と考えて行なう、とめいめいが、めいめいの立場の上に立って、めいめいの都合のいいように解釈して協力しあうことを暗黙のうちに諒解しあい黒白をつけないうちに、とにもかくにも「山鉾巡行」を、めいめいの立場から軌道に押しあげ、走らせた、というのが、当時の正直なところであった。

(宮本正雄「祇園祭・その後」『京都』244号、1971年7月)

山鉾巡行を神事として位置づけた場合、国家神道解体を命じていたGHQの許諾は容易に得られないことになる<sup>(11)</sup>。加えて神道が一宗教と見なされるようになったため<sup>(12)</sup>、日本国憲法の政教分離原則に則り、神事に関する一切の公的支出が禁じられた。しかし、山鉾の管理維持、運営費がすべて山鉾町の負担となれ

ば、いつかは負担をまかないきれない山鉾町が出てくることは明白であり、戦前から観光資源でもあった山鉾巡行の魅力は損なわれてしまう。こうした諸問題を解消するには、行政は山鉾巡行を「観光」行事として公に位置づけ、財政的な援助を行う必要があった。終戦直後、GHQの統治下にあった京都という街の生々しい状況がこの記事から浮かび上がるのである。

しかし、行政が山鉾巡行を「観光」行事と位置づけたとしても、それはあくまで、「便法として一応」といったものであった。まして、それを取り巻く人々の認識自体が変わるわけではない。山鉾巡行もまた「信仰」のあらわれという認識は神社側に残り、その認識のすり合わせができなかった結果が、1955年の二項対立的な議論へと繋がったといえよう。

それでは『京都』誌上ではどのような認識が示されていたのか。

(前略) 祇園会が御霊会から起こった古い祭礼であることは云うまでもないが、悪疫よけの意義を離れて、景気直しの市民祭として発達して来たのは江戸時代前期からのことで、祇園ばやしの異国調もこの頃から聞かれるようになったわけである。

本来、山鉾巡行は神社の主掌するものではなく、産土神より神社へ仕向けるものであるから、既に形態や本義を一転しているこの山鉾巡行が、その順路を変更しても、観る人の多きを望む観光京都としては、むしろ当然のことと誰しもが納得してくれることである。

道路は狭く人はふえる一方の現在では、観衆に事故なきを期することが、いや高き神徳を傷つけず、祭礼を楽しむ人々の心をいためない最善の途であろう。

(出雲路敬和「祇園会あれこれ」『東京と京都』18号(通巻55号)、1955年7月)

成安女子短大教授であり、京都観光バスの観光部長も兼任していた出雲路敬和は、このように巡行路変更を正当化している。ポイントは山鉾巡行が行われる意義の捉え方であろう。出雲路は、祇園祭が江戸時代から「悪疫よけの意義を離れ、景気直しの市民祭」へと変化しており、現代の山鉾巡行は「既に形態や本義を一転している」と説く。つまり、もはや山鉾巡行には除疫、防疫を願うという祇園祭そのものの意義が失われ、代わりに「景気直しの市民祭」へと変化したとい

うのである。そのような「市民祭」であれば、観光客が事故なく山鉦を観覧できるようにする巡行路変更は「むしろ当然のこと」で「いや高き神の徳を傷つせず、祭礼を楽しむ人々の心をいためない最善の途」というのである。同様の意見は他にも見られる。

（前略）この祇園会の大きい特徴は、神社が行う行事ではなく、氏子等が氏子丈で神職とはノウタッチで行われている行事である。あの山鉦の行列には神職は一人もいない。昔のままに山鉦の人々がやっているので、近年山鉦連合会が主催している。

（中略）山鉦巡行はどこからどこ迄が本筋であるか。俗にお渡りと云うが、四条烏丸に集合した山鉦は（中略）四条柳馬場と高倉の間で「籤改め」をし、四条寺町の角で八坂本社に向つて「神楽」の囃子を奉納してお渡りは終了する。これで此行事は済んだのである。それで囃子も急ピッチの戻り囃子になる。（中略）七月は祇園会の外、目ばしいものは一つもない。勢い市観光課も祇園会一本宣伝につとめ観覧車も年々増加し四条通も飽和状態になった。こうした点から山鉦巡行道変更の話が出て来た。事情を知らぬ一部の人々の反対はあつたが、京都市も山鉦連合会が賛成して昨三十一年七月十七日から寺町通を北へお池通りを西は新町へ行くことに変更する事になった。

（中略）祇園会は疫神除の為に始まつたものであるから、今日の様に医薬の進歩して伝染病にかゝる人が少なくなつて来たからは、此行事の主たる目的は亡くなつてしまつた事になる。

（中略）勿論こうした行事には多額の費用がいる。然し利するのは京都市民であるから市は市祭としてこれに入費を入れてやればよい。八坂神社の祭礼は神輿渡御をもつと盛大にして八坂祭として行うのは当然である。

（中略）京都市が夏の行事として本腰を入れてやるのも又当然ではあるまいか。

（水島清二郎「祇園会随想」『東京と京都』42号（通巻79号）、1957年7月）

既に巡行路変更が決定されたあとではあるが、水島もまた「疫神除の為に始まつた」ものの「医薬の進歩」の結果、「此行事の主たる目的は亡くなつてしまつた」としている。その上で京都市は祇園祭を「市祭」として位置づけ、さらには神事であるはずの神輿渡御

をも「もつと盛大にすべき」と述べている。ここには出雲路同様の認識があると推察できる。さらに興味深いのは、山鉦巡行は「籤改め」並びに八坂神社への「神楽」奉納で本来の役割を終えており、その後の巡行は単なる帰路に過ぎないという点であろう。ここにも巡行路変更には何の問題もなかったことの論拠を示そうという意図が見られる。

出雲路や水島は、山鉦巡行が民衆主体の祭りである点を、「神社の主宰するものではなく」（出雲路）、あるいは「神職とはノウタッチで行われている」（水島）と表現している。山鉦巡行が民衆の祭りであることと、神事であることとは本来、別の問題である。しかし出雲路らは山鉦巡行を、民衆の祭り＝非神事として位置づけ、それも時代の移り変わりによって生じた避けようのないもののように論じている。果たして出雲路や水島のように、1950年代の段階で除疫の意義が失われていたと見られるかは疑問であり、信仰や神事の捉え方がいささか狭いようにも見える<sup>(13)</sup>。ただ、そのような認識が祇園祭の「観光」行事化、あるいは「観光」資源化を論理的に支えていたと考えられよう。

一方、1956年の巡行路変更を山鉦町が受け入れた背景には、山鉦町の経済的負担を軽減させる補助金政策が深くかかわっていたといわれている<sup>(14)</sup>。先に見た宮本の記事にも以下のように記されている。

（中略）こんにちの人々のものの考え方、生活方式の現実やその環境の変貌、祭りを支えている構造の混乱、そこから出てくる古式の崩壊、要員の不如意や、特殊な技術の継承の問題、文化財としての保存対策、さらには、保存修理を含めて巡行諸経費年間約三千万円といわれるこれらの資金の手当など、いまや、祇園祭は、精神的にも物理的にも、来るところまで来た、という感が深い。まこと、その前途は極めて多難である。

所詮、これらのことは、もはや「氏子」だけでは、どうにもならないことなのだ。

（中略）かくして、祇園会山鉦巡行は、むかしの、いわゆる「氏子」だけのものではない、ということをややでも認識しなくてはならないようになった。そのことは「神事」と「巡行」が分離していく方向を辿らざるをえないようだ、とも思われる。

（宮本「祇園祭・その後」（前掲））

戦後の混乱の中では、もはや「氏子」（ここでは主に山鉦町）だけで長い伝統と歴史を持つ山鉦巡行を維

持することはできない。ただ、山鉾巡行が「観光」資源として戦前以上の成果をあげれば、京都市や市交通局などからの補助金は増額される。山鉾巡行の伝統を守り継ぐためには、山鉾町も観光化政策に協力することが求められた。もちろん、「観光」資源でありつつ「信仰」を担う神事でもある、という認識は多くの山鉾町で共通していたものと推察されるが、1955年の議論が二項対立的に進められたことで、「観光」か「信仰」かを選ばねばならない——というよりも「観光」を選ばねばならない、というシビアな選択を迫られたのである。観光行政に携わっていた宮本は、上記のような構造が作り出されたことから、むしろ山鉾巡行は民衆（「氏子」）「だけのものではない」という認識を示すのである。

### 第3節 紙芝居・小説・映画『祇園祭』と「町衆」認識

さて、前節では戦後京都における観光行政が山鉾巡行にどのような影響を与え、また人々の認識はどのような捉え方となったのかを述べた。これらは山鉾巡行が復活した1947年から50年代の京都における情勢と密接にかかわっていた。

ところで1950年代の京都の政治状況を見ると、当初革新勢力から支持を受けていた高山が市長に<sup>(15)</sup>、そして同じく革新勢力からの支持を受けた蜷川虎三が府知事になるなど、極めて革新勢力の強い場であったことがわかる。そのような中で、戦後直後の1945年に結成された日本史研究会、そして1949年に結成された民科京都支部歴史部会は、京都を拠点に民主的かつ科学的な歴史学の在り方を模索し実践していくこととなる。折しも吉田内閣が進める日米単独講和への反対運動、日米間での安全保障条約締結をめぐる反対運動が全国的に高まり、民族の自立が叫ばれた時代でもあった。このとき歴史学では、アメリカと対峙するための民族自立を念頭に置き、今まで見出されてこなかった自立した民族の歴史を明らかにしようという機運——国民的歴史学運動の機運が高まっていた<sup>(16)</sup>。紙芝居『祇園祭』はまさにそのような時代背景の中で製作されたのである。

冒頭でも触れたように、紙芝居『祇園祭』の製作過程については先行研究で詳しく触れられているため<sup>(17)</sup>、概要だけ触れておこう。製作に携わったのは、日本史研究会、民科京都支部歴史部会に所属する京大・立命館大の院生や4回生約20名である。当初は、1952年5月に開催される歴史学研究大会20周年記念レクリエー

ションの一環として作成されたものだったが、その後、国民的歴史学運動の潮流のなか、京都府下で次々に上演されていった。1953年には東京大学出版会にて林屋辰三郎（当時・立命館大学教授）の解説を併記する形で紙芝居の絵と詞書が掲載され、書籍化されている。

紙芝居の内容は、以下の通りである。応仁・文明の乱で荒れ果てた京で、祇園祭を行おうと「町衆」たちが画策。山鉾巡行の準備も着々と進む中、突然、幕府は町衆が税を支払っていないことを理由に祇園祭中止の命をくだす。町衆たちは祇園社執行にも直訴をするがらちが明かず、そのうち山鉾だけでも自分たちだけで渡そうという機運になる。幕府の武士はそれを聞きつけ、リーダー格の彦二郎を捕え、鎮静をはかろうとするが、かえって町衆たちは団結し武士らに立ち向かう。結果、彦二郎は町衆の手で解放され、武士たちは逃げ帰る。彦二郎たちは、町衆の祭りとしての山鉾を渡す。

ここでは林屋の提唱する「町衆」論<sup>(18)</sup>を理論的な軸として、「町衆（抵抗者）—山鉾巡行」と「幕府（権力者）—祇園祭」のわかりやすい対立構造で物語が展開している。また、祇園社（八坂神社）は、幕府に抵抗できない極めて無力な存在として描かれており、大枠では幕府側に組み込まれているといえる。さらに、幕府により中止に追い込まれたものとして神輿渡御を含む「祇園祭」そのものが「山鉾巡行」と対比の関係で示されている。

もちろん紙芝居の内容はフィクションであるが、歴史的な事実として『祇園社記』第十六天文2年（1533）6月6日条に以下のような記述が見られる。

明日祇園会の事、先ずは延引せらるべきの由、山門として申し入るの段、佐々木弾正少弼申し上げらるの旨候間、斯くの如く仰せ出だされ候、恐々謹言  
天文二 六月六日 (飯尾) 堯連  
 当社執行  
 玉寿丸殿<sup>(19)</sup>

室町幕府將軍義晴が、奉行人飯尾堯連を通して「明日」に迫った祇園会の「延引」を祇園執行職の玉寿丸に命じた史料である。一方、これに対して群書類従本『祇園執行日記』天文2年6月7日条（すなわち、上記史料の翌日）には以下のような記述がある。

七日、山鉾ノ義二付、朝山鉾大蔵カ所へ下京ノ

六十六町ノクワチキヤチ共、<sup>(月行事)</sup>フレ口、<sup>(懸)</sup>雑色ナト皆々  
来候テ、神事無之共、山ホコ渡シ度事ヂヤケニ候  
(後略)<sup>(20)</sup>

「神事（祇園会）これ無くとも山鉦渡したき事」すなわち、幕府の命令通りに7日の神事は行われなくとも、山鉦は巡行させたい、という民衆の意思表示である。紙芝居『祇園祭』の作り手たちは、当時この『祇園執行日記』の輪読をしており、この一文を祇園会中止に対する町衆の反権力闘争の表れとする林屋の史料解釈を受け、紙芝居に反映させたものだという<sup>(21)</sup>。また林屋は「町衆らは信仰上から祭をいとなむのではなく、祭を通じて山鉦に町衆の示威を行おうとするのである」とも述べている<sup>(22)</sup>。奇しくも前節で触れた非神事としての山鉦巡行という認識が林屋から学生たちへと広まっていたとも考えられるのである。

このように林屋、そして学生たちの認識によって作り出された紙芝居『祇園祭』だが、天文2年6月6日条を再度見ると「延引せらるべきの由、山門として申し入るの段」とある。実は、式日通りに祇園会が執行されることに強く反発したのは、幕府ではなく山門（比叡山延暦寺）であった。そして山門の意向を無視できなかった幕府が延引を命じたことが先行研究により明らかにされたのである<sup>(23)</sup>。いずれにせよ、山門の影響については学生らも紙芝居には入れず、権力者（幕府）と抵抗者（町衆）というわかりやすい構図に仕立てたことになる。

実際、『京都』誌上でも以下のような記事を見ることができる。

(中略) この山鉦巡行は直接に八坂神社の祭典に関係をもっているのではなく、多くの氏子の協力によって行われるもので、鉦町として祇園会に対する行事である点が、一般の祭礼とは異なっているわけである。

(中略) 室町時代を迎えたので、祭礼の形式もほぼ決まり、(中略) 豪華な練りものも登場するようになって、信仰というよりは寧ろ観る目に綺麗な祭礼であるということのために、人気が高まっていたのであった。

(中略) 幕府の咎めるところとなって、天文二年六月十六日の翌日から祇園祭を控えて、神事のとり止めを命じられた。が、これに対して町の人々は、この処置に激昂し、大きな騒ぎとなり、つい  
に「神事は神社の行事であるが、山鉦の巡行は町

の行事であって、神事とは別のことである。それゆえに山鉦はわれわれで出すことにする」ということで、これを強行したのが、祇園祭が神社の手をはなれ、町衆の手によって山鉦の巡行が行われることになった由縁でもあるわけである。

(草林潤之助「祇園会と俳句」『東京と京都』7号(通巻44号)、1954.7)

特に後半部は紙芝居『祇園祭』の世界そのものといっても良く、やはり山門の意向については触れられていない。この草林の記事は1954年のもので、前年に紙芝居が書籍化していることから、恐らくは影響を受けたものと推察される。

ただし、『京都』誌上では、この草林の記事を除き紙芝居からの影響は見られない。そしてまた、1955年の日本共産党第6回全国協議会（六全協）において国民的歴史学運動が批判、全面的に見直され紙芝居『祇園祭』も忘れ去られていくのである。

#### 第4節 60年代以降の祇園祭認識

第2節で見たように60年代に入ると山鉦巡行はますます観光資源として活用されていく。そのような山鉦巡行を目の当たりにして複雑な思いを抱く人々も少なくなかったようだ。

(中略) 而して此の祇園祭の山鉦巡行も、今日既に一つの曲り角に来て居る。科学智識の発達せる今日の人々から考えるなれば当然の事だが、祇園祭の山鉦に就いての「神性」が最近頃に下落し其の信仰の失われたことは甚だしい。(後略)

(高谷宗之助「山鉦と俗信」『東京と京都』90号(通巻127号)、1961年7月)

(前略) しかし昔はわたしらにはなにかしら心の底からこみ上げてくる愉しさがあり、信仰心もあったが、今はなにもない。他人も同様であろう。それは外見がだん／＼立派になるが、全然ショー化したためと思う。

(藪田嘉一郎「鴨東昔語」『東京と京都』102号(通巻139号)、1962年7月)

(前略) 第二次世界大戦以後、急速に町内——従って山鉦——を維持するメンバーも変わって行った。

神に対する観念も、祭礼に対する精神も移って

行った。(中略)

過去の祭礼はそれに奉仕する人々のところに神に仕えるよろこびがあった。今の祭礼はこの種のよろこびで支えきれない重荷になった一面、祭礼の在り方に新しいショウ的な企劃面が大きくなった。(後略)

(高谷伸「祇園祭」『東京と京都』114号(通巻151号)、1963年7月)

これらの意見に共通するのが、「信仰」面での変化、さらにいえば「信仰」の喪失ということになるだろう。先述したように、民衆主体の祭りであることと、神事であることとは本来対立するものでもない。しかし50年代は「観光」と「信仰」、あるいは「民衆」祭礼と「神社」祭礼、「ショウ」と「神事」といった二項対立的な構図での議論がなされていった。そして前祭巡行路の変更を機に、人々の山鉾巡行をめぐる認識も「観光」資源として、あるいは民衆主体の非神事的行事として、一定確立した認識になっていったと考えられる。

それを顕著に物語るのが1966年の合同巡行の決定といえよう。実は1955年段階の議論において、既に前・後祭の合同巡行は京都市側が検討事項として山鉾連合会にも報告していたのだが、そのときは流石に大きな形態の変化に賛同は得られなかったという<sup>(24)</sup>。ところが、60年代に入ると、後祭を担当する山鉾町から前祭との格差——観光客からの注目度の違い——に不満が噴出し、さらに交通規制や商業形態の変化などが理由となり大きな議論もないまま、合同巡行がすんなりと決定している<sup>(25)</sup>。一方、『京都』誌上では、賛否を明らかにするような議論すらなされていないのである。

こうした中、一度は忘れられていた権力者と抵抗者、そして抵抗者の祭りとしての祇園祭、という構図に再び光が当てられることとなった。それが1961年、西口克己による小説『祇園祭』の刊行である<sup>(26)</sup>。ただし、西口は紙芝居に見られる大まかな構図は用いつつ、紙芝居ではカットされている描写を盛り込んでいる。例えば以下の場面である。

将軍家の急使がもたらした不意の命令は(中略)恐ろしく高飛車で、冷酷なものであった。いよいよ後二日に迫った祇園会にたいし、比叡山門の訴を楯として、突如として神事停止を命じてきたのである。その理由としては、京町衆が昨年来、法華一揆と名乗って狼藉の数々をつくしたこと、幕

府の命に背いて地子銭不払いの拳に出ていること、などが挙げられていた。

(西口克己『祇園祭』中央公論社、1961年)

町衆の中に法華宗に帰依する者が多いことを理由に、山門は町衆と対立関係となり、攻防を繰り返した結果、祇園会の「神事停止」に町衆が直面する場面である。すなわちここには、紙芝居では描かれていない「山門」と「法華宗(=町衆)」との対立が記されている。この場面については、西口と旧知であった林屋の影響が見られる<sup>(29)</sup>。

さらに小説では、天文5年(1536)に起きた天文法華の乱を彷彿とさせる記述も見え、「権力者」と「町衆」という対立構造の中に、「法華宗(=町衆)」(もっとも小説の中では法華宗と町衆との深い繋がりについて詳細な描写はない)と「山門(=権力者)」という対立も内包され描かれている。

以上を踏まえると、紙芝居が祇園祭認識に影響を与えたように、当然この小説に描かれた山門、あるいは法華宗のイメージも戦後の祇園祭認識に少なからぬ影響を与えても良いはずである。しかし、「山門」と「法華宗」の対立構造と祇園祭とを結び付けて語る言説は『京都』誌上を始め、ほぼ見られない。その理由として一つには、この小説が絶版と再版を繰り返していた、つまり多くの人の手に渡る機会が少なかったことがあげられよう。ただし、それだけではなく、小説から7年後に公開された映画『祇園祭』の影響もあったと考えられる。

1968年11月に公開されたこの映画は、出演陣が映画会社の枠を超えたオールキャストであること、そして学生運動が世界的な盛り上がりを見せる中、権力者に立ち向かう町衆を主人公に据えるわかりやすい物語構造であったことから、公開1週目にして67306人もの観客を動員した。さらにこの映画は、公開前年の1967年10月に、当時の蜷川革新府政が映画の全面的な制作協力を府議会で決定している。まさに京都府を推してのプロジェクトでもあった。

この映画は当然、西口の小説『祇園祭』を原作としているが、その原作と異なる点が大きく2点あげられる。1つが「祇園祭」、「祇園会」の呼称の差異であり<sup>(30)</sup>、もう1つが小説に見られる「山門」と「法華宗(=町衆)」という対立構造を切り捨てていることであった。対立構造をよりわかりやすく打ち出すことで映画はヒットし、小説で描かれた「山門」と「法華宗」の対立構造は浸透することがなかった、と考えられるの

である。

では、この映画はどのような影響を残したのか。実は『京都』誌上を見る限りでは、そこまで強く影響された記事は見られない<sup>(31)</sup>。ただし、映画『祇園祭』以後、確実に「町衆」という言葉は広まり、根付いたようである。それまでは、林屋が提唱した歴史学用語として知られていたが、『京都』誌上の中で用いられることはなかった。それが1968年を境に

本誌（前略）本当は、祭りの司祭者のような立場だから、無位無官、町衆平民の息子というのじゃ重みがなくて具合が悪い、という考えもあったのでしょう。（中略）

（「座談会 祇園祭」『京都』220号、1969年7月）

富士谷（前略）それに祇園祭には、桃山以後の京の町衆のもった国際的な文化の高さといったものがみられる。（後略）

（「対談 祭と女性」『京都』232号、1970年7月）

田中 おっしゃる通り、「祇園祭」は民衆の祭です。（中略）この民衆——町衆といっていますが、むかしははえぬきの町衆というものがたくさんいましてね（後略）

（「座談会 祇園祭あれこれ 生粋の鈴町の住人が語る！」『京都』268号、1973年7月）

といった具合に「町衆」という言葉が頻出するのである。さらに時代が降るにつれ、祇園祭以外の場面でも、ことあるごとに「町衆」という言葉が見られるようになる<sup>(32)</sup>。そこには京の街や伝統・文化を作り上げた名もなき市井の人々という意味が込められているのである。

一方で、別表1からもわかる通り『京都』誌上では70年代半ば以降そもそも祇園祭の記事自体が減少し、あるいはガイドやマップのみの掲載となっていく。この理由の1つには、祇園祭がすでに観光資源として確固たる位置にあり、加えて「町衆」の祭りという認識が映画『祇園祭』で広まったこと、さらに合同巡行後は大きな変化もなかったことから、祇園祭、山鉦巡行認識が固定化されてしまった——つまり、新たな情報を提示できなくなったことが推察される。そういった中で祇園祭特集を大々的に組んでいる1973年7月号は特異ともいえよう。とりわけ八坂神社宮司・高原による「神事としての祇園祭」は、一連の祇園祭祭礼の中

で山鉦巡行もまた神事であることを主張しようという意図が見られる。しかし、この号を最後におよそ1986年7月号まで祇園祭の特集は組まれていない点は見逃ごせない。

また1977年から刊行されるようになった季刊誌『山鉦町』（山鉦連合会編）や、60年代から70年代にかけて多くの祇園祭（あるいは八坂神社）関連書籍が出版されたことで、『京都』ではあえて祇園祭以外の様々な面からスポットライトを当てる試みをしていた、とも考えることができる。いずれにせよ、『京都』誌上を見る限り、祇園祭に関する様々な認識の提示は50年代をピークとしており、以降は徐々に固定化した認識で語られるようになったことがわかるのである。

しかし、そのような時代にあっても、なお新たな祇園祭像の模索が進められた事例はある。それはこれまで一切検討されてこなかった、紙芝居・小説・映画『祇園祭』以降の流れを汲む、絵本『火の笛』の作成である。この点については以下、第Ⅱ部で論じたい。

## 第Ⅱ部 絵本『火の笛』があらわす祇園祭認識

### 第1節 田島征彦と小説『祇園祭』

絵本作家・田島征彦は、京都市立美術大学（現・京都市立芸術大学）染色科専攻科出身で、1976年、田島36歳のとき成安女子短大講師の職を辞して、本格的に絵本の世界に入ってきた。そのとき出版社から依頼されたテーマが祇園祭の絵本化であった<sup>(33)</sup>。高知県出身の田島は、大学入学以後京都に住みながら、長らく京都（正確には京都の人々）に距離を感じていたらしく<sup>(34)</sup>、絵本の依頼がくるまでは祇園祭にも関心がなかったという<sup>(35)</sup>。そのため田島は絵本作成のため1年間足繁く山鉦町や八坂神社に通い取材していたのだが、その最中に祇園会館でリバイバル上映されていた映画『祇園祭』を初めて観ている。

既に映画公開当時から10年近く経過していたが、田島自身はこの映画を、自分が描こうとしている祇園祭とまったく異なる祇園祭——すなわち歴史的にみて様々な階層の民衆たちによって再興された祇園祭——を新鮮に受け止め、面白いと感じたという。

それは田島という作家個人の思想性と大いに関係しているであろう。元々、田島は地元の土佐高校で自由民権思想を学ぶ研究会を立ち上げており、地元・土佐出身の植木枝盛に強い関心を抱いていた<sup>(36)</sup>。そのためか、田島は絵本作家としてデビューしてから現在に至るまで、一貫して名も無い民衆の側に自らの立ち位

置を置いて、表現し続けている<sup>(37)</sup>。祇園祭絵本を作成中の田島にとって、民衆の祭礼としての山鉦巡行は刺激的であったことは想像に難くないのである。

田島のデビュー作、絵本『祇園祭』は染織の技法を用いて、情緒的な場面と力強い場面を効果的に織り交ぜたものとなった<sup>(38)</sup>。この絵本は山鉦町の人々にも高評価で受け止められ、後に第6回世界絵本原画ヴェンナーレ展金牌賞を受賞している。この作品で絵本作家としての足掛かりを作ったのである<sup>(39)</sup>。

その後、映画『祇園祭』の原作である西口の小説を読んだ田島は「あまりに絵画的な物語」であることから、自分が描かなかったもう1つの祇園祭を作品化することを決意<sup>(40)</sup>。この「あまりに絵画的な物語」という田島の感想は、まさに小説の前後が紙芝居作品と映画作品であったことと深く関係しているだろう。当然、田島の頭には祇園会館で観た映画のシーンが断片的に思い出されたであろうし、そもそも小説の基盤となったものが紙芝居という絵画中心で構成される媒体だったからに他ならない。その後、他の西口作品も「とり憑かれ」るように読み<sup>(41)</sup>、ついに絵本化の承諾を取りに、1979年夏、西口宅へと直接出向くのである。

ここに田島という絵本作家個人による祇園祭認識の変遷を見ることができよう。とりわけ田島が祇園祭に当初はそれほど興味を抱いていなかったという点は、京都の外部者からの視点ともいえよう。それが取材を続けるうちに、華やかなイメージとは真逆の裏方が支えるからこそ祇園祭が成立することを知り、さらに映画、そして小説『祇園祭』の世界に辿りついたといえる。ただ、本稿では田島の認識の変遷ではなく、田島自身がその後、いかに独創的な「祇園祭」認識を作り出し、絵本作品を通じて影響を与えていったかに問題を絞りたい。

西口宅で下絵を見せ、絵本化の承諾を得た田島は実に59頁にもわたる長編絵本を描きあげる。当初は西口が文を、田島が絵を担当する予定であったが、西口の記事が絵本向きでないことから本人の承諾を得て田島が文も担当することになったという<sup>(42)</sup>。ただし、田島は小説をダイジェストにするのではなく、西口が言わんとしていることを感動的に描くことに心血を注いだ<sup>(43)</sup>。今、その『火の笛』を見ると、小説『祇園祭』を(1)短縮、(2)選択、(3)絵画化、(4)加筆、(5)変更といった作業の跡が見て取れる。これらの作業により『火の笛』が映画同様に小説を基盤に置き(西口の意図を汲み)つつ、異なる作品として生み出されたことがわかる。以下、(1)～(5)について考察しよ

う<sup>(44)</sup>。

## 第2節 小説『祇園祭』から絵本『火の笛』へ——短縮、選択、絵画化、加筆、変更

まず(1)短縮である。小説を限られた枚数の絵本にする上で最も多く行わなければならない改変作業は、要約や省略、削除などによって物語を「短縮」することであろう。短縮する上で何を省いたかを検討することは、作者の意図や解釈を理解することにつながる。『火の笛』における短縮箇所は多数あり、すべて列挙することは不可能なため、主な短縮箇所を挙げることにする。

一つには小説『祇園祭』には描かれている登場人物を複数省略していることが挙げられる。特に注目されるのは、主人公・新吉とその恋人で河原者の娘・あやめの協力者として登場した貧乏公家、山科言継の省略である<sup>(45)</sup>。言継の存在は、支配者階級の中で唯一、被支配者階級に心を寄せる存在として描かれており、小説における登場人物・階級の力や対立関係の構図に、単純に二分できない複雑さを持たせている。しかし、絵本では大胆に省略することで、ただ物語を短くするだけでなく、支配者階級と被支配者階級の対立構造を単純かつわかりやすく改変しているのである。

さらにいえば、絵本では「町衆」と比叡山の僧や祇園社執行職、幕府、管領、富裕層の町衆などとの対立は最小限に表現し、詳細なやりとりは省略することで、主な対立は侍たち武士階級と町衆を始め様々な被支配者階級に集約していることが指摘できる。このような短縮の技法を用いたことで、田島自身は見たことのない紙芝居『祇園祭』と同じ構造になるのである。ここに絵を中心に展開する紙芝居と絵本との共通性を見出すことができよう。

次に(2)選択である。小説の内容を大幅に短縮する必要がある一方、あえて省略せず絵本として表現する「選択」をした箇所は、田島の『祇園祭』認識を顕著に出ている場面ともいえよう。これも2つの場面に絞って検討したい。

第一に、田島のデビュー作、絵本『祇園祭』でも描かれた鉦の車についての描写である。小説『祇園祭』では、祇園祭の準備における様々な作業の様子が描かれ、その一つとして鉦の車を作る場面も描かれている。しかし、『火の笛』はそれら様々な作業を大幅に省略される中で、車を作る場面だけは選択し、丁寧に描いているのである。ここには祇園祭取材中に感じた田島の個人的な思いが反映されている。田島は取材の中で、

華やかに見える山鉦巡行だが、最も重要な役割を負っているのが、日の目をあまり浴びず、懸命に裏方に徹する車方であることに大変感動を覚えたという<sup>(46)</sup>。ここに田島という作家が小説・映画『祇園祭』に魅かれるべくして魅かれたことがうかがえる。すなわち、町衆や、河原者、馬借、つるめそといった被支配者階級の人々が、祇園祭を再興させる『祇園祭』の世界は、田島の車方への感動と通じるものがあるといえよう。

次に、祇園祭当日の「太陽」に関する文章描写である。『火の笛』では、祇園祭当日の描写3か所で、小説『祇園祭』の描写と対応し、太陽の情景描写が記されている。小説と絵本の描写は以下の通りである。

### 【1】 祇園祭当日の朝

小説 「建仁寺町の一画から、何百人というつるめそが勢揃いして、鴨川に向かって押し出してきたのは、すでに太陽が東野のそらに高くかがやきはじめた辰の刻であった。」<sup>(47)</sup>

絵本 「何百人ものつるめそが勢ぞろいして、鴨川にむかって押し出してきたのは、すでに太陽が東の空にかがやきだしはじめたところであった。」<sup>(48)</sup>

### 【2】 山鉦巡行開始の場面

小説 「陽光にきらめく巨大な長刀鉦をゆっくりと振り仰いだ（中略）出発の合図だ。」<sup>(49)</sup>

絵本 「焼けつくような太陽の下。（中略）出発の合図だ。」<sup>(50)</sup>

### 【3】 武士から矢を射たれ致命傷を負いながらも、鉦に乗る新吉の様子

小説 「その新吉のうつろな瞳は、人々の波を遥かにこえて、炎天の彼方をまじろぎもせずじっと見つめていた——あたかも白銀色にかがやく炎天の彼方に幻の蝶が無数に舞い狂い、その蝶の群れのなかに永劫の舞いを舞っているあやめの姿を発見したかのように……。」<sup>(51)</sup>

絵本 「青空の中に、白銀色に燃えあがる火を見ていた。」<sup>(52)</sup>

このように見ると、祭当日の太陽の描写は、ただ小説に見られる描写を元に記した何気ない情景描写とも思われる。しかし小説では、町衆と侍が山科の百姓を攻めに行くときも太陽の様子を繰り返し描写するが、絵本では当該場面における太陽の描写は省略し、祇園祭のときの太陽描写のみを選択し、描いているのであ

る。さらに、デビュー作・絵本『祇園祭』あとがき「燃えあがる祭りの中で」では、祇園祭の説明をする中で、「17日午前9時～午後1時 山鉦巡行」の項目で「焼けつく太陽は、もう高く昇り、祭りは最高潮です。」<sup>(53)</sup>と記し、ここでも祇園祭の山鉦巡行と太陽をセットにしている。ここで参考となるのが、田島の大学時代の恩師、稲垣稔次郎の祇園祭に対する解釈である。田島が学生時代に稲垣から聞いた山鉦巡行の解釈とは、(普段はおとなしい)京の町衆が巨大な鉦で疫病を天に封じこめ、灼熱の太陽に向かうための行進、というものであった<sup>(54)</sup>。この稲垣の解釈は印象深いものとして田島に残っており、絵本『祇園祭』を制作することになったときも、この言葉を思い出したという。以上のことから考えると、田島が絵本『祇園祭』や『火の笛』に太陽の描写を記したのは、恩師稲垣の祇園祭解釈を意識してのことではないかと推察できる。このように田島自身の経験に根差した価値判断が、選択の技法から浮かび上がる。

次いで(3)「絵画化」である。文章では省略していることを絵では表現し、絵と文の両方を読み解くことで、初めて物語全体が理解できるようにさせる、絵本独自の作業といえよう。この作業は絵本作品の理解や世界観の提示と直結するものであり、絵本の絵が決して文の補助に留まるものではないことを明らかにするものでもある<sup>(55)</sup>。

具体的には、長刀鉦と船鉦の表現があげられる。小説『祇園祭』では、祇園祭の準備の目玉に今までにない大きさの長刀鉦と、今までにない造形の船鉦を作る様子が詳細描写されている。しかし、『火の笛』の本文では、いずれも全面的に省略されており、そのかわり、絵で表現されているのである。長刀鉦は、絵本『祇園祭』と同じく縦長の構図にすることで、めくりの効果と相まってその特異な大きさを表現している。一方、船鉦も見開き一面の山鉦巡行の絵の右半分を使って大きく描き、特に読者の目をひくように強調している。

このような特異ともいえる巨大な絵は、読者に強烈な印象を与えるとともに、その印象に相応しいだけの意義を読み取らせることとなる。ここではそのような巨大な鉦を町衆たちだけの手で作り上げる、裏を返せばそれだけ町衆たちには力がそなわっていることを示しているのである。さらに、小説を読んでいけば、この絵を一目見て『火の笛』本文では省略された鉦の物語を、まるで絵の「行間」を読むように、想起することにも繋がるのである。

さらに(4)原作にはない描写を「加筆」している

点も見逃せない。長編小説『祇園祭』を絵本化するには、大幅に短縮する必要がある。しかし、それでも加筆したのは、田島が特に重要な表現だと考えていたに他ならない。例えば、一つにはあやめの舞いを

「それは、白い炎が命かぎり燃えつきようとするときのように、はげしく、美しい舞いであった。」<sup>(56)</sup>

と、独自に加筆して形容している。また、舞いの際にあやめの従者・権次が吹く笛を「火の調べ」<sup>(57)</sup>という曲であるとするのも『火の笛』にしか見られない（小説版では曲名は明らかにされない）。これらは二つとも絵本のタイトルを『火の笛』と変更したことから、作品の中で「火」を強調するために加筆したと考えられる。

最後に（5）原作の内容の「変更」という改変作業がある。

### 【1】祇園会と祇園祭

まず、小説では題名こそ『祇園祭』だが、本文では一貫して当時の呼び方である「祇園会」と記されている。しかし、絵本『火の笛』では「祇園祭」という現在使われている呼び名で統一しているのである。この点は第I部でも触れた映画『祇園祭』と同じ意図があったといえよう<sup>(58)</sup>。

### 【2】火の調べと囃子の旋律

第二の変更点としては、新吉が吹く笛についてである。小説では、権次が吹いていた笛の音から工夫し、「どこかあの権次の笛の旋律に似て」いるものの、「けっしてそれを真似たものでもない新吉独自の曲を山科言継の前で披露し、それを陰であやめが聴く」<sup>(59)</sup>。そして、その曲を言継がアレンジし、祇園祭の囃子となっている。一方、絵本では、「火の調べ」という権次が笛で吹いた曲を新吉が思い出しながら、銀閣近くのすすきの根もとで一人吹いているところを、通りがかったあやめと権次が聴く、といった変更がなされているのである<sup>(60)</sup>。絵本では山科言継は省略していること、さらに『火の笛』という絵本の題名に合わせ、権次と新吉が吹いた曲名を「火の調べ」としたのであろう。

### 【3】『祇園祭』と『火の笛』

最も大きな変更点は作品名の変更である。田島は既に『祇園祭』という題名の絵本作品を同じ童心社から出版していたという事情から、別の名にする必要性があった。しかし、『火の笛』とはどのような発想から

くるものなのか。

## 第3節 「火」と「笛」——祇園囃子の力と意義

当然のことながら、人間の生活にとって「火」を制御し、利用することは人間らしい生活を得るために必要不可欠である。一方、ひとたび「火」が制御不可能となった場合、そこには人間の生活を破壊、破滅させる力を帯びている。この絵本において、当初、「火」は戦乱を強くイメージさせるものであり、制御不可能なものとして描かれている。また争いの中で町衆の心にわき上がるコントロールしがたい「怒り」も、「町衆たちの怒りは、よけいに燃えあがった」<sup>(61)</sup>と燃え盛る炎のイメージと重ねられているのである。

また、理性でコントロールしがたい「恋」も火が象徴している。小説では新吉とあやめの恋を激しくまわる火の輪（大晦日のおけら火）が象徴しており、『火の笛』でもこの描写を描いている。二人の恋は、身分を越える「結びつき」を象徴している。町衆の新吉と河原者のあやめの恋は、町衆と河原者や馬借、つるめそといった被支配者階級の者たちが、身分を越えて結びついていくきっかけを作っていくものとしても描かれているのである。

そして、先に見たあやめの舞いの場面<sup>(62)</sup>。火のように激しく美しい「情熱」や、情熱の限り燃える「命」の火を象徴していると考えられる。この火は人の生き様や心意気の強さを表しており、それは「火の調べ」を奏でる笛によって表象されるものである。しかし、この情熱や命、魂を表現する笛は、小手先のテクニクで制御できるものとしては描かれていない。「火の調べ」を新吉が習得するまでの間、新吉は様々な困難にぶち当たる。時に山科での農民征伐のように、自身で制御不能な「火」の力により、本来は手を取り合える人間たちと殺し合いまでしてしまっている。しかし「火の調べ」を修得することで、自身の火を制御する力をつけていくとともに、他の町衆や、同じく被支配者階級の者たちの中に抑え込まれていた火をわきたたせていく——すなわち自分と他者との火を制御する役割を担うのである。

「火」とは、田島が言う「支配されるもの、差別を受ける側からの血の叫び」<sup>(63)</sup>のことでもあるだろう。それは次第に権力者にとっては制御不能な「魔性の火」と感じるまでに大きくなっていくこととなる。それゆえに、新吉は死に際ですべての火の発端となった権次の火の笛を思い出したのだとも考えられるのである。

これら一連の表現は、理性では制御しきれず言語化

できなかったものを、音楽という芸術表現によって、初めて表出できたということを表している。これは、論理的な文章とは異なる芸術表現——『火の笛』においては音楽だが、田島にとっては染織で描く絵——の持つ可能性を巧みに捉えた表現なのである。そしてまた、それは山鉦の上で奏でられる囃子の意義そのものをクローズアップさせる。

以上、小説とは異なる『火の笛』について見てきた。繰り返しになるが、この『火の笛』から浮き出る祇園祭、山鉦巡行認識についてまとめよう。まず小説や映画と共通する認識としては、当然、祇園祭は民衆の祭りであり、権力との抵抗手段でもある、ということだろう。民衆に目を向け続ける田島という作家自身の思想性が、小説、映画の世界と見事にマッチしているのである。

しかし、車方をクローズアップさせ、民衆の中でもさらに目立たない存在こそ重要な職務を負っていることを明示させる、というのは『火の笛』独自の視点である。そしてそれは、華やかな面ばかりに目が行きがちである人々の視点を変え、華やかに見える山鉦巡行にもある種の泥臭さ、汗臭さがある、そしてそれこそが重要であるとの認識を示すのである。

また、物語の中心軸をわかりやすい構造で示すといった点は紙芝居『祇園祭』と共通しているが、例えば町衆たちの持っている力を文字ではなく大きな鉦の絵で示すといった示し方は、紙芝居、そして映画より一層、読み手の感情に訴えかけるものとなっている。説明過多にならなくとも、視覚で理解をさせる。まさに田島が1年間をかけて取材した際の感覚や認識を『火の笛』の中でも投影させているのである。

そして、山鉦巡行における、囃子——音の力を、小説、映画以上に示している点も重要な点として指摘できる。もちろん、小説・映画ともに笛の音は物語の核となっている部分であるが、田島はそこに「火」というプリミティブな要素を入れ込み、「火の笛」に人々の喜怒哀楽をすべて内包させている。この笛が「火の調べ」を奏でるからこそ、山鉦巡行は成功したのであり、祇園囃子には重大な意義が隠されていることを暗に示す。これは紙芝居・小説・映画『祇園祭』には見られない認識といえよう。

## おわりにかえて

第I部でも示した通り、1980年はすでに祇園祭、山鉦巡行は「観光」資源としての認識が定着化しつつあ

り、また別表2でもわかるように、全国的にはまだ革新勢力に力があつたとはいえ、7期28年の蜷川府政を支えた革新勢力は衰えていた。そういった中で、第II部で取り上げた『火の笛』は、ともすれば時代の徒花のようにも捉えられる<sup>(64)</sup>。しかし、紙芝居・小説・映画とも異なる祇園祭認識を提示したこの作品は、後に合唱組曲化（別紙3）され、1981年には初上演を、2010年には田島が中心となって行っていた「祇園祭展」でも披露されているのである<sup>(65)</sup>。もちろん、合唱組曲「火の笛」は絵本とは異なる世界観、そして祇園祭認識を提示することになった。それは決して多くの人々に影響を与えたとはいえないが、80年代初頭においても紙芝居以降の祇園祭認識が支持され、かつ新たに創生されていたことは、京都という場だからこそできたといえよう。

ここで再度、別表2の80年代の流れを見ていただきたい。1956年の前祭巡行路変更、1966年の合同巡行開始、といった大きな変化は見られないが、1981年には蟻螂山が、1985年には四条傘鉦がそれぞれ復活し、また毎年のように新たな祇園祭の催しや試みがなされている。冒頭に述べたが、程度の差はあるとはいえ、時代の移り変わりに合わせて祇園祭は変化していく。そういった変化の積み重ねが、人々の認識を変えていくことは本稿で述べてきた通りである。

2014年7月に刊行された『京都』（『月刊京都』）では、後祭復活を各山鉦町に呼びかけ実現させた吉田孝次郎・山鉦連合会理事長（当時）と杉本秀太郎・伯牙山保存会理事長（当時）との対談が巻頭に掲載されている。この中で吉田氏は以下のように述べている。

吉田 都会のお祭りのことですから、神事と観光が別個にあるのではなく、それがひとつになっ  
ずっと続いて来た、これが大事なこと。今ではど  
うでしょう。観光の面が勝ち過ぎてはいないでし  
ょうか。バランスがいびつになり、なくしてしま  
った静けさと厳かさを取り戻すのは、条件の整っ  
た『今』だと思います。

（杉本秀太郎・吉田孝次郎「祇園祭が帰ってきた！」『月刊京都』756号、2014年7月）

山鉦連合会の会長が、信仰と観光、その両面が祇園祭には欠かせない、これまでは観光の面が「勝ちすぎた」いた、と述べている。この吉田氏の認識は、これまでの観光一辺倒であった時代とは異なることを象徴的に示しているのである。

さらに吉田氏は『京都新聞』において自らの思いを以下のように語っている。

(中略) 合同巡行の祇園山鉾行事が世界の無形文化遺産としてユネスコに登録されたのは、今から5年前の平成21年のこと。これはまことに喜ばしい事ではあるが、仮の姿のまま巡行形態が固定されてしまうことに危機感を持った私は、平成22年の9月に後祭山鉾行事復興の議論を山鉾町に呼びかけたのである。

(中略) 諸問題を解決すべく議論を進めるうちに、山鉾行事本来の姿が見えてきたのであり、「神の存在あってこそその山鉾風流」との認識を深めることになったのである。

(「ソフィア 京都新聞文化会議 408吉田孝次郎氏」『京都新聞』朝刊、2014年7月19日付)

先に見た『京都』の対談および該当号の特集タイトルが「祇園祭が帰ってきた！」(傍点筆者)とあることも通じているのだが、後祭が行われなかったこの約半世紀の間の山鉾巡行は「仮の姿」である、という認識がうかがえる。このような認識があったからこそ、吉田氏は前祭・後祭の復活に向け尽力し、2014年に実現したのである。すなわち、これまでの合同巡行は「仮の姿」であり、前祭・後祭の復活に伴い祇園祭の「真の姿」が「帰ってきた」という、新たな祇園祭認識が説得力のあるものとして人々に捉えられ、また広まっているといえよう。そこに人々の祇園祭、山鉾巡行に求める姿があり、そしてそこから京都の現在が浮かび上がるのである。

末尾になったが、本稿作成にあたっては立命館大学の田中聡先生をはじめとする「京都戦後史学史研究会」の皆さま、またインタビューに快く応じてくださった田島征彦先生、山本忠生氏、その他、関係各位にこの場を借りて御礼申し上げます。ありがとうございました。

#### 【注】

- (1) たとえば河内将芳『祇園祭と戦国京都』(角川学芸出版、2007年)では紙芝居から映画『祇園祭』までを、花森重行「国民的歴史学運動における政治の多様性——民科京都支部歴史部会の紙芝居『祇園祭』に即して」『新しい歴史学のために』(275号、2009年)や田中聡「紙芝居「祇園祭」の再発見」『国民的歴史学運動の京都地域における展開家庭に関する研究』(科研費基盤研究C研究成果報告書、2011年)では紙芝居『祇園祭』について、さらに田中「映画『祇園祭』の構想をめぐる対立——『キネマ旬報』誌上の論争から——」『京都戦後史学史研究会研究成果報告書』(立命館大学人文科学研究所助成プログラム、2015年)では映画『祇園祭』作成後について、詳細に論じられている。
- (2) 月刊京都HPサイトより「昭和25年的京都」ページ(URL:<http://www.gekkan-kyoto.net/dekigoto.htm> / 最終閲覧:2015年9月29日)参照。
- (3) なお本稿第Ⅰ部は鈴木が、第Ⅱ部は谷本が担当している。それぞれの担当箇所は立命館大学人文科学研究所助成プログラム「京都戦後史学史研究会」での成果によるところが大きい。既に京都戦後史学史研究会『京都戦後史学史研究会 研究成果報告書』(立命館大学人文科学研究所助成プログラム、2015年)に鈴木・谷本とも論考を発表しているが(鈴木「『月刊京都』から見る祇園祭認識の変遷——1950年代を中心に——」、谷本「絵本作家、田島征彦による『火の笛』の表象——『祇園祭』の絵本化——」)本稿では論点を新たに設定し、報告書以降の調査内容なども盛り込んでいる。
- (4) 山路興造『京都芸能と民俗の文化史』(思文閣出版、2009年)。
- (5) 前掲河内(1)参照。
- (6) 実はその前年の1955年6月の総会でも「1年限り」という条件付きで、賛成多数で前祭巡行路変更が可決されている。しかし、1ヶ月後の巡行には間に合わないとの結論になり次年度へ議題が繰越すこととなった(別表2参照)。
- (7) ただし、1954年に文化財保護法が改定され、指定は解除される(1959年、記録作成の処置を講ずるため無形の民俗資料として指定)。
- (8) たとえば  
(前略) この間までは何もかも中止々々どしたが、世の中が治まつたというのか、宣傳時代になつたというのか、だん—行事なども復活して嬉しい思うてます。(喜多喜多「祇園祭のあとさき」『京都』110号、1951年6月)などの記事からもわかる。なお、この記事は『京都』誌上で初めて祇園祭に言及した記事である。
- (9) なお、この前祭巡行路変更の議論については、伊藤節子「1956年の祇園祭山鉾巡行路の変更に関する考察—京都市の政策動向に着目して—」『日本建築学会計画系論文集』(75(658)、2010年)に詳しい。伊藤は、この観光政策の背景に昭和20年代後半からの交通網の整備による京都観光ブームがあったと指摘している。
- (10) 『京都新聞』1955年5月24日(火・朝刊)付記事より、

- 巡行路変更が決定した際に高原美忠宮司は「千年も連続とつづいた『神の道』を変更することは反対です。（略）」と発言している。
- (11) 実際に1948年に巡行復帰した山鉦は、GHQ対策として御神体である神功皇后像を外して巡行するなどしている。
- (12) 戦前の大日本帝国憲法下においても条文上では信教の自由は保障され、また政教分離の方針を政府は持っていた。しかし、肝心の神道については、非宗教として位置づけ国民（臣民）道徳などと密接に結びつけられていった。そのため1945年12月にGHQは国家神道解体指令（いわゆる「神道指令」）を出し、翌46年2月に解体された（以上、村上重良『国家神道』（岩波書店、1970年）参照）。
- (13) 祇園社の創始については未だ詳しいことがわからないこともあり、祇園会そのものもいつから始まったかは様々な説がある（久保田収『八坂神社の研究』（神道史学会、1974年）、本多健一「祇園祭と神泉苑」『藝能史研究』（207号、2014年））。ただ、「蘇民将来之子孫也」と記された粽や近世紀まで祇園社祭神として祀られていた防疫・除疫のカミ、牛頭天王の神号を記した掛け軸が山鉦町に残されていることから、祇園会・祇園祭は一貫して防疫・除疫を意図していた祭りであるとも捉えられる（なお、中世期の祇園社祭神に関しては、斎藤英喜『陰陽道の神々』佛教学通信教育部、2007年）や斎藤『荒ぶるスサノヲ、七変化』（吉川弘文館、2012年）、権東祐『スサノヲの変貌 古代から中世へ』（佛教学、2013年）、また拙稿（鈴木）「スサノヲと祇園社祭神——『備後国風土記』逸文に端を発して——」『論究日本文学』（92号、2010年）などを参照されたい）。
- (14) 伊藤前掲（9）参照。
- (15) ただし、高山と革新勢力との蜜月は1年ほどで終りを遂げ、その後は保守勢力との関係性が強くなる（別表2参照）。
- (16) 国民的歴史学運動については田中聡研究代表『国民的歴史学運動の京都地域における展開家庭に関する研究』（科研費基盤研究C研究成果報告書、2011年）所収の諸論考に詳しい。
- (17) 河内前掲（1）、花森前掲（1）、田中（2011）前掲（1）参照。
- (18) 「町衆」というタームの初出は、林屋辰三郎「町衆の成立」『思想』（312号、1950年）であり、同じく林屋「郷村成立期に於ける町衆の文化」『日本史研究』（14号、1951年）や林屋『中世文化の基調』（東京大学出版会、1953年）など林屋の諸論考の影響を受け、佐藤心一や桜井好朗らが「町衆」について早くに論じている。
- (19) 竹内理三編『増補 続史料大成』45 八坂神社記録三（臨川書店、1978年）より引用。
- (20) 竹内理三編『増補 続史料大成』44 八坂神社記録二（臨川書店、1978年）より引用。
- (21) 田中（2011）前掲（1）参照。
- (22) 林屋（1951）前掲（18）論考。
- (23) 河内『中世京都の都市と宗教』（思文閣出版、2006年）ならびに河内前掲（1）参照。なお、この点に関する詳細は鈴木前掲（3）で述べている。
- (24) 伊藤前掲（9）参照。
- (25) このときは鈴鹿山のみ合同巡行に反対し、1966年時の合同巡行には参加しなかった。しかし、翌年からは参加することとなった。
- (26) なお西口は小説執筆の経緯を以下のように振り返っている。
- （前略）若い映画プロデューサーが、林屋君の監修した民科京都歴史部会の〈祇園祭〉という、紙芝居式の挿絵入りの小冊子をみせてくれた。これをもとにして小説を書きませんか、というのである。（中略）参考にはなかったが、残念ながら、わたしは創作欲をそそられなかった。
- （中略）わたしは原水協の平和行進に参加して、山科から洛南まで炎天下をあるいた。（中略）そんなわたしに肩をかしてくれたのは、一緒に行進していた若い学生諸君であった。（中略）その年の祇園祭の山鉦巡行を市役所前でゆっくり見物する機会に恵まれた。ふと見ると、鉦の長い太綱を引いている若者たちのなかに、わたしの知っている学生——平和行進で肩をかしてくれた学生たちがまじっていた。（中略）あとで聞くと、日当六百円と弁当つきのアルバイトに雇われたのだという。しかも、その学生や山鉦を、アメリカの派手な観光客たちが、きゃっ、きゃっとふざけながら、しきりにカメラやハミリに写しているのである。（中略）わたしはこの光景をみて、無性に腹が立った。屈辱に似た怒りがこみあげてきたのである。
- わたしは、その夜（中略）祇園囃子のSPレコードをかけて、じっと耳をかたむけた。（中略）その囃子にまじって、ときおり、あたかも深い地底からのうめき声にも似て、〈えんやら、やら……〉と叫んでいる掛声を聞いたとき、わたしは、はっとして体をかたくした。それは形容しがたい感動であった。（中略）わたしの小説は、このとき、わたしなりのテーマをつかみとったのである。
- （西口克己「小説と祇園祭——へそまがりの私見——」『京都』268号、1973年7月）
- (29) 民科京都支部歴史部会編『祇園祭』（東京大学出版、

1953年)における林屋の解説には、  
(前略) <sup>(ママ)</sup>こした法華一揆のさなかに、天文二年の祇園会の日が近づいてまいりました。それは民衆によつてつくられた祇園会の歴史のなかでも、かつてなかつたような大きな民衆のころの高まつた日でありました。というのは、この祇園会をさゝえる町衆こそは、同時に法華一揆をたゝかう民衆であつたからであります。幕府は山門の訴を理由として、六月六日、突如として明日の神事停止を命じたのです。山門は祇園社の本所ですが、この場合は山門と法華一揆との対立が、このような事態を生み出したと云えましょう。

と記されており、小説と通ずる認識が見られる。実際、西口が執筆中、随時、林屋に電話で助言を求めていることは、1966年刊行の弘文堂版小説『祇園祭』まえがきに附記されている。一方で西口自身もまた「住民自治の歴史」を調べる過程で京都の法華一揆の記録に辿り着き、そこに「日本における最初の都市自治体ともいふべき、京町衆の民主的住民組織の芽生え」を見たとしている(西口克己「小説と祇園祭——へそまがりの私見——」『京都』(268号、1973年7月)。

(30) 小説ではタイトルこそ『祇園祭』だが、一貫して当時の呼称である「祇園会」が用いられている。一方、映画では権力者たちが中止の可否を決める祭礼は「祇園会」、町衆が行う山鉦巡行は「祇園祭」と、これもまたわかりやすい対立構造で記している(詳細は、鈴木前掲(3)参照)。

(31) 映画公開後の1969年7月号に作家・神馬弥三郎による小説『祇園祭』の評論文が掲載されているが、それが唯一ともいえる記事である。

(32) 田中(2011)前掲(1)でも紹介されているが、『京都』誌上の座談会でも以下のような会話がなされている。

北村 しかし町衆といっても、商品は最初の頃はそんなに力は持っていなかったと思うんです。(中略)だから町衆といういい方では商人の話ができないと思いません。江戸時代に入って商人が金を握って強くなってはじめて町人としての商人がでてくるんで、町衆やなんて僕らは思えないですな。(後略)

(略)

司会 町衆という言葉自体、最近になって復権されてきたようですね。

石原 町衆という言葉を現代になって使い出したんは誰なんや。

湯浅 “祇園祭”の映画と違う。

竹下 物産協会の“町衆展”の時も、やってる人たちは町衆という言葉がピッタリ来るというので、意気揚々

としていましたね。;

(略)

北村 商売で成功して町衆というんでなくて、“町衆展”で成功したから逆に俺たちは町衆だみたいな(笑)、少し外れたところで町衆が復権したような気がしますね。

(略)

竹下 僕も町衆という言葉と京都ブームの間に、何か関連があるように思うんですけど、昭和三十年頃にはまだ“町衆”なんていいませんでしたね。

北村 僕らは“町衆”なんて言葉、使ったこともなければきいたこともなかったしね(笑)。

(「座談会 気になる町に生きて 町衆その生み出したセンスと演出」『京都』1976年6月)

(33) 田島『祇園祭』(童心社、1976年)。

(34) なお、筆者(谷本)は2014年7月22日、田島氏本人に京都市内でインタビューを行っている。詳細は拙稿(谷本)前掲(3)に記した。

(35) ただし、学生時代に恩師・稲垣稔二郎から聞いた稲垣独自の祇園祭解釈については、田島が抱いていた京都のイメージと異なることもあり鮮明に覚えていたという。詳細は後掲(54)参照。

(36) 田島『憤染記 田島征彦作品集』(染織と生活社、1995年)

(37) たとえば田島『てんにのぼったなまず』(福音館書店、1985年)など。

(38) 拙稿(谷本)前掲(3)参照。

(39) ただし、絵本『祇園祭』は商業的には決して成功ではなかったという。絵本『祇園祭』発刊当時、編集者の千々松勲は「この本(注・『祇園祭』)は、田島さんの全力を出しきった、豪快な絵本です。だから、専門家からは、高い評価があると思います。しかし、芸術性は高くても、ストーリーがないので、実際には、売れるかどうか心配です。」と評しており(田島前掲(27))、実際絵本『祇園祭』は一度絶版になっている。

(40) 田島『『火の笛』のであい』(西口克己 廊と革命と文学と) (かもがわ出版、1987年)。

(41) 田島前掲(40)。

(42) 本人インタビューより。

(43) 本人インタビューより。

(44) なお、絵本作品の分析であれば挿絵の解釈も必要不可欠であるが、本稿では原作(小説)との差異、そして『火の笛』から浮かび上がる祇園祭認識に焦点を当てるため、必要最低限にとどめたい。なお、挿絵分析は拙稿(谷本)前掲(3)で詳細に行っている。

(45) もちろん山科言継といえば、『言継郷記』を著した実在

の公家（1507-1579）を思い浮かべるが、小説では極めて町衆に近い立場で貧乏公家として描かれている。『言継郷記』には貴族・皇族の名だけでなく、一民衆の名も度々見られるため、民衆に近い公家というイメージが拡大したものと思われる。

- (46) 本人インタビューより。
- (47) 西口克己『祇園祭』（中央公論社、1961年）。なお、本稿での引用ページ数の表記は1966年2月に弘文堂で発刊されたものを用いた。
- (48) 西口・田島『火の笛 祇園祭絵巻』（童心社、1980年）p.45。ただし、本稿中にも示した通り、絵・本文ともに田島が担当しており、西口は実質的に原作者扱いとなる。
- (49) 西口前掲（47）p.202。
- (50) 田島・西口前掲（48）p.46。
- (51) 西口前掲（47）p.216。
- (52) 田島・西口前掲（48）p.59。
- (53) 田島前掲（33）。
- (54) 田島『ピコちゃんを食べた』（飛鳥堂出版室、2002年）および本人インタビューより（前掲（35）参照）。
- (55) 香曾我部秀幸・他編『絵本をよむこと「絵本学」入門』（翰林書房、2012年）参照。
- (56) 田島・西口前掲（48）p.7。
- (57) 田島・西口前掲（48）p.27。
- (58) 前掲（30）参照。
- (61) 田島・西口前掲（48）p.15。
- (62) 前掲（56）参照。
- (63) 田島征彦・田島征三ほか『激しく創った!! 田島征彦と田島征三の半世紀』（童心社、2006年）。
- (64) 『火の笛』は後に第30回小学館絵画賞を受賞し、本作の絵に対する評価は高かった。しかしデビュー作の『祇園祭』以上に内容が大人向けであったこともあって、商業的には成功しなかったと田島は述べている（本人インタビューより）。
- (65) なお、合唱組曲「火の笛」については、拙稿（谷本前掲（3））で考察を行っている。本稿では紙面の都合上、考察は割愛したが、資料的価値を考え別紙3に組曲の解説ならびに歌を掲載している。

【別表1】雑誌『京都』（白川書院発刊） 祇園祭に関する記事一覧

号数	年月	タイトル	筆者名・座談会参加者名〔肩書き〕	頁数	備考
10	1951.6	祇園祭のあとさき	喜多喜多〔祇園伊勢源女将〕	p53-55	
21	1952.7	祇園会三題	高谷伸〔劇作家〕	p4-6	特集「天の橋立」。
23	1952.9	八坂神社の祭神 須佐之男命の新研究	鈴木貞一〔古代史家〕	p38-42	
24	1952.1	京都にも生活がある	宮本正雄〔京都市人事課長〕	p38-41	
39(2)	1954.2	景清と祇園祭 —京都のファンから東京の落語家へ—	下村百日亭〔趣味家・随筆家〕	p39-41	前号より『東京と京都』（2号目）
44(7)	1954.7	祇園会	和田敏〔郷土史家〕	p14-18	特集「祇園」。左記三つの記事は「祇園会」という小特集扱いになっている。
		京の祇園会	田中緑紅〔郷土史家〕	p26-29	
		祇園会と俳句	草林潤之助〔俳人〕	p40-44	
55(18)	1955.7	祇園祭夜情（詩）	白井喜之介〔詩人・月刊京都主宰〕	p7	目次を見る限り特集は組まれていないが、実質的には祇園祭特集となっている。
		祇園会あれこれ	出雲路敬和〔京都観光バス観光部長〕	p8-12	
		祇園祭とお茶	井上頼壽〔郷土研究家〕	p12-13	
		祇園会のかげ口	山田兼也〔画家・書家〕	p20-21	
		座談会 祇園祭あれこれ	福武昇〔京都市観光局長〕・田中安五郎〔氏子・人形司田中屋主人〕・高原美忠〔八坂神社宮司〕・辻重彦〔二軒茶屋中村樓主人〕・白井喜之介〔詩人・月刊京都主宰〕	p68-71	
57(20)	1955.9	月鉦東上	長谷川かな女〔俳人〕	p33-35	
67(30)	1956.7	祇園祭のこと	記載なし	p10-17	小特集「祇園祭」（なお、「祇園祭あれこれ」は小特集外）。
		祇園祭あれこれ	霜島之彦〔書家〕	p29-36	
79(42)	1957.7	コンチキチン	古澤岩美〔書家〕	p7-9	小特集「祇園会特集」。
		祇園会と狂言	藪田嘉一郎〔郷土史家〕	p10-14	
		祇園まつり	山田兼也〔画家・書家〕	p15-17	
		祇園会随想	水島清二郎〔京都民俗研究家〕	p17-18	
		京都の夏の思い出	倉島竹二郎〔中国文学研究家〕	p30-32	
		祇園会に思う	出雲路敬和〔成安女子短大教授・京都観光バス観光部長〕	p44-47	
87(50)	1958.3	蘇民の御守	井上らいじゅ〔頼壽〕〔郷土研究家〕	p26-28	
91(54)	1958.7	祇園会の山と鉦との伝説	出雲路敬和〔成安女子短大教授・京都観光バス観光部長〕	p16-21	小特集「祇園祭」。
		祇園祭	〔記述なし〕	p22	
		平安京の夏と祇園	秋山謙藏〔歴史家・女子美術大学教授〕	p28-33	
103(66)	1959.7	祇園会の解明	出雲路敬和〔成安女子短大教授・京都観光バス観光部長〕	p7-10	小特集「祇園祭」。
		祇園囃子（座談会）	【太鼓方】川崎勝三〔会社員〕・澤正七〔ロープ商〕・辻井壽雄〔佛具商〕、【笛方】奥田理一郎〔染色業〕・中西由治郎〔不動産〕・林勝〔染色業〕・江崎寛〔染色業〕	p41-43	
114(77)	1960.6	座談会 祇園祭を語る	高原美忠〔八坂神社宮司〕・出雲路敬和〔成安女子短大教授・京都観光バス観光部長〕・亀井辰次郎〔あり善主人〕・辻重彦〔二軒茶屋中村樓主人〕・田中常雄〔山鉦連合会会長〕・喜多喜多〔祇園伊勢源女将〕・白井喜之介〔月刊京都主宰〕	p37-46	
115(78)	1960.7	祇園会 屏風まつりの思い出	出雲路敬和〔成安女子短大教授・京都観光バス観光部長〕	p18-21	小特集「祇園祭」。
		座談会 祇園祭を語る（続）	高原美忠〔八坂神社宮司〕・出雲路敬和〔成安女子短大教授・京都観光バス観光部長〕・亀井辰次郎〔あり善主人〕・辻重彦〔二軒茶屋中村樓主人〕・田中常雄〔山鉦連合会会長〕・喜多喜多〔祇園伊勢源女将〕・白井喜之介〔月刊京都主宰〕	p56-61	
127(90)	1961.7	祇園祭	堂本漆軒〔漆芸家〕	p7	小特集「祇園祭」。
		祇園会	出雲路敬和〔成安女子短大教授・京都観光バス観光部長〕	p8-10	
		山鉦と俗信	高谷宗之助〔郷土史実家〕	p49-53	
139(102)	1962.7	鴨東昔話 祇園祭の頃	藪田嘉一郎〔京都研究の会主幹〕 岩満重孝〔書家・画家〕	p10-13 p46-48	小特集「祇園会」。
150(113)	1963.6	こんにちのすさのおのみこと	真下五一〔作家〕	p7-9	小特集「京都考」の中にある。
151(114)	1963.7	祇園祭の推移	高谷伸〔劇作家〕	p7-9	小特集「京の夏」の中にある。
163(126)	1964.7	祇園祭を見る まつり随想七月 祇園祭など	真継不二夫〔写真家〕 田中義弘〔まつり同好会主宰〕	p25-27 p69	真継文は小特集「京のさまざま」の中にある。
175(138)	1965.7	祇園囃子の起原	藪田嘉一郎〔京都研究の会主幹〕	p11-14	座談会以外は小特集「ぎおん祭」。
		京の夏	長田恒雄〔詩人〕	p15-17	
		祇園祭と美術	塩見青嵐〔画家・随筆家〕	p18-21	
		座談会 祇園祭を聞く —菊水鉦建立—	平野威馬雄〔詩人・フランス文学者〕、白井喜之介〔月刊京都主宰〕、松本元治〔菊水鉦再建願主・織維業〕	p63-66	

187 (150)	1966.7	前後夜夜 青山行者餅 橋仙多佳女の霊に贈る	高谷伸〔劇作家〕	p7-10	小特集「まつり」。
		祇園会	徳力富力郎〔版画家〕	p26-28	
		祭りの思い出 祇園会の思い出	峰雪栄〔作家〕 栗林貞一	p11-13 p57-59	
199 (162)	1967.7	今は昔の屏風祭	真下五一〔作家〕	p17-18	樋口は当時の月刊京都表紙 を担当。
表紙のことば 祇園祭の船鉦	樋口富麻呂〔日本画家・版画家〕	p19-20			
202 (165)	1967.10	京都おちこち31 祇園祭	松田元〔郷土史家・画家〕	p60-71	
203 (166)	1967.11	京都おちこち32 祇園祭	松田元〔郷土史家・画家〕	p61-71	
203 (167)	1967.12	京都おちこち33 祇園祭	松田元〔郷土史家・画家〕	p47-49	
220	1969.7	祇園散譚	中村直勝〔日本史研究者〕	p16-19	特集「祇園町と祇園祭」。な お、前々号(通巻118)より『京 都』名義に。
		山鉦のはじまりのことなど	相馬大〔作家〕	p30-34	
		祇園会と俳句	草林潤之助〔俳人〕	p40-43	
		座談会 祇園祭	樋口富麻呂〔日本画家・版画家〕・前川清二〔亀 屋清水主人〕・吉村一男〔亀屋良長主人〕・藤本 茂〔三条若狭屋主人〕・能勢晏男〔鶴屋長信主人〕	p45-55	
		“鉦の人”が観た祇園祭	川崎勝三〔華道専門学院顧問・随筆家〕	p73-77	
京都と文3 示威高めた町衆の『祇園祭』	神馬弥三郎〔作家〕	p87-90			
232	1970.7	連載随筆 祇園さんの祭	長谷川幸延〔作家〕	p12-15	特集「祇園」。
		私の…祇園祭青山	川内通生〔大阪府立高校国語科教諭〕	p20-23	
		山鉦の「とけいそう」と「かざぐ るま」など	近藤豊〔美術史家〕	p29-30	
		うなじの長い白鷺—還幸祭の宵—	大路とし子〔国文学者〕	p45-48	
		対談 祭と女性	小田義彦〔京都女子大教授〕・富士谷あつ子〔随 筆家〕・臼井喜之介〔月刊京都主宰〕	p61-65	
		祇園祭・山鉦の実態 —見る・聴く・触る— 七月の行事と見どころ	川崎勝三〔随筆家〕 松田元〔郷土史家・画家〕	p69-74 p75-80	
244	1971.7	青山抒情	臼井喜之介〔詩人・月刊京都主宰〕	p9	特集「貴船・鞍馬」。
		はじめに 祭を待ちつつ	千宗左〔表千家家元〕	p10	
		祇園祭—その民衆性について—	西口克己〔作家・映画「祇園祭」原作者〕	p42-45	
		祇園祭・その後	宮本正雄〔元京都市観光局長〕	p46-51	
やぶにらみ京の行事3 七月、祭りは哀調のリズムにのって	神馬弥三郎〔作家〕	p61-64			
268	1973.7	カラーグラビア 祇園祭	(記述なし)	p5-10	特集「祇園祭」。なお、この 号から現在の判型になった 模様。
		祇園祭の風物	(記述なし)	p14-20	
		祇園祭縁起—その変遷と営み—	川嶋将生〔京都市史編纂所嘱託〕	p22-28	
		祇園のおばあちゃん	北条秀司〔劇作家〕	p29-31	
		小説と祇園祭 —へそまがりの私見—	西口克己〔作家・映画「祇園祭」原作者〕	p32-35	
		池田屋騒動と祇園祭	明田鉄男〔作家〕	p36-39	
		青山よもやま	依田義賢〔シナリオ作家〕	p40-42	
		神事としての祇園祭	高原美忠〔八坂神社宮司〕	p43-49	
		祇園山鉦の装飾—植物を中心として—	近藤豊〔大阪教育大教授(工学博士)〕	p50-52	
		鉦の装飾—金具と植物	編集部	p53-54	
		山鉦の構造と鉦立て	松田元〔郷土史家・画家〕	p61-63	
		青山のみどころ	松田元〔郷土史家・画家〕	p64-69	
		祇園祭の日程	(記述なし)	p70-71	
		座談会 祇園祭あれこれ 生粋の鉦町の住人が語る!	田中常雄〔祇園山鉦連合会会長〕・今村耕三〔祇 園山鉦連合会副会長〕・松本元治〔菊水鉦再建顧 主〕・臼井喜之介〔詩人・月刊京都主宰〕	p72-76	
		祇園祭と料理	国分綾子〔評論家〕	p85-88	
		吉井勇と祇園まつり	川内通生〔大阪府立高校国語科教諭〕	p109-110	
イラストでつづる 京の年中行事	永井ひろし〔イラストレーター〕	p116-117			
京のことば	相馬大〔作家〕	p118-119			
アナうれし アナはずかし記7	武部宏〔近畿放送アナウンサー〕	p160-161			
279	1974.7	もうひとつの祇園祭	松田元〔郷土史家・画家〕	p50-58	特集「京焼き」。
291	1975.7	特別企画 祇園祭 —笛と鉦と太鼓—	(記述なし)	p41-48	特集「石庭」。
		きもの百科11 —京の着倒れ— 祇園祭にちなんで	服部和子〔服部和子きもの学院院長〕	p57	
293	1975.9	幻の都・京都精神史8 原始への郷愁—祇園祭をめぐって	栗田勇〔作家〕	p49-56	
314	1977.7	祇園祭イラストマップ	(記述なし)	p114-115	特集「近江路」。
		祇園祭 徹底ガイド	(記述なし)	p116-121	
326	1978.7	行事ハイライトあれこれ 祇園祭 をめぐって	(記述なし)	p128-129	特集「茶道具」。
337	1979.7	祇園祭を識る	ふるたち・さぶろう〔郷土史家〕	p77-83	特集「山の寺」。
		江戸・明治・大正・昭和の出版物 心意気結集して 54年祇園祭	(記述なし)	p84	

340	1979.10	祇園祭と西陣織り	西川禎哉	p63-65	
360	1981.7	今日は、どこやろ —京近江の行祭事—7月	(文) 徳野博久 [京都観光解説者]・(写真) 角野康夫	p11-21	特集「京の映画と映画村」。
372	1982.7	今日はどこやろ、祭りと行事 —七月—祇園祭の山鉦 (附)	(文) 徳野博久 [京都観光解説者]・(写真) 横山健蔵・角野康夫	p117-128	特集「土と炎の祭典—多彩な焼きものに会える陶器祭り—」。なお、左記の記事は1981年度と異なり、祇園祭以外の祭礼も紹介。
385	1983.8	祇園祭宵山—駒形提灯	(取材) 徳野博久 [京都観光解説者]・(写真) 角野康夫	p23	特集「火祭りの世界」。左記記事はこの特集の中の1項目。
386	1983.9	祭り	(取材) 田中保子 [歌人]・(写真) 杉原龍	p35	特集「鴨川にロマンを求めて」。左記記事はこの特集の中の1項目で祇園祭と葵祭が取り上げられている。
397	1984.8	本誌ズバリインタビュー 実現しよう昭和の山・鉦の建造 田中常雄会長、町衆を鼓舞	田中常雄 [祇園祭山鉦連合会会長]・(聞き手) 山岡景一郎	巻末 (頁無し)	
409	1985.8	山鉦巡行も大切、神輿渡御も大切	仁輿倫夫 [八坂神社権禰宜]	p46	特集「京の神輿」。左記記事はこの特集の中の1項目。
410	1985.9	ルポタージュ 八坂神社・神輿担ぎに挑戦	〔「本誌スタッフ」とのみ記述。また「協力・三若神輿会」と明記〕	巻末 (頁無し)	
420	1986.7	祇園祭の魅力	小林薫 [京都大学・米山俊直ゼミカ]	p14-17	特集「町衆の意気脈脈 祇園祭」。祇園祭の特集号は1973年7月より13年振り。巻末編集後記にて編集長・畠中氏が「肌で祭りを体験してきた京都大学教授・米山俊直教室のメンバーにルポ的に綴ってもらった」と記している。
		神輿渡御	坂根伸治 [京都大学・米山俊直ゼミカ]	p18-23	
		山鉦行事	林謙一郎 [京都大学・米山俊直ゼミカ]	p24-31	
		露天商 (コラム扱い)	谷真澄 [京都大学・米山俊直ゼミカ]	p26	
		屏風祭 (コラム扱い)	岩本純一 [京都大学・米山俊直ゼミカ]	p28	
		お稚児さんの祇園祭	(記述なし)	p32-37	
		祇園祭と私	田中保子 [歌人]	p38-39	
432	1987.7	動く世界の美術館 祇園祭	烏田崇志 [京都市国際交流課課長]	p40-47	特集「涼景色」。
444	1988.7	祇園祭 (color photo)	(写真) 横山健蔵	p1-8	特集「祇園祭」。
		祇園祭山鉦をつづる	(文) 松田元 [郷土史家・画家]・(写真) 横山健蔵	p12-23	
		15・16日 宵々山と宵山	(文) 田中保子 [歌人]・(写真) 横山健蔵	p24-29	
		17日 山鉦巡行 神幸祭	(文) 谷真澄・(写真) 横山健蔵	p30-33	
		24日 花傘巡行	(文) 嶋寄圭子・(写真) 横山健蔵	p34-35	
		祇園祭行事日程	(記述なし)	p36	
		祇園祭雑学百科	(文) 勝部智・(写真) 横山健蔵	p37-40	
		ぎおん祭・夢物語り	(写真) 横山健蔵	p41-43	
456	1989.7	ぎおん宵まつり (color photo)	(写真) 横山健蔵・角野康夫	p1-8	特集「宵山情緒」。
		鉦町周辺マップ	(取材) 松本加延子	p12-13	
		宵山を歩く	(取材) 梅原光彦・(写真) 横山健蔵・角野康夫	p14-32	
		祇園囃子	田中保子 [歌人]	p15	
		〈京都人の祇園祭〉(コラム扱い) 鷲舞	田中保子 [歌人]	p17	
		〈京都人の祇園祭〉(コラム扱い) ちょうちんの灯	田中保子 [歌人]	p18	
		〈京都人の祇園祭〉(コラム扱い) 浴衣がけ	田中保子 [歌人]	p21	
		〈京都人の祇園祭〉(コラム扱い) 女人禁制	田中保子 [歌人]	p23	
		〈京都人の祇園祭〉(コラム扱い) お守り売り	田中保子 [歌人]	p25	
		〈京都人の祇園祭〉(コラム扱い) 祇園祭の粽はたべられない	田中保子 [歌人]	p26	
		〈京都人の祇園祭〉(コラム扱い) 祇園祭ははも祭	田中保子 [歌人]	p29	
		〈京都人の祇園祭〉(コラム扱い) 無言詣り	田中保子 [歌人]	p30	
		〈京都人の祇園祭〉(コラム扱い) お千度	田中保子 [歌人]	p31	
		〈京都人の祇園祭〉(コラム扱い) 祇園祭行事日程	(記述なし)	p41	
		〈京都人の祇園祭〉(コラム扱い) 祇園祭の魅力すべてをつづる	(取材) 嶋寄圭子	p42-48	
		〈京都人の祇園祭〉(コラム扱い) 祇園祭憧憬 (color photo)	(写真) 横山健蔵	p49-51	

※号数で ( ) があるものは『東京と京都』時の号数。

※肩書きが確認できない者は [ ] をつけていない。

※祇園祭の話題に少し触れている程度の記事は取り上げていない。

【別表2】戦後から1980年代までの祇園祭関連年表

西暦 (和暦)	祇園祭（主に山鉾巡行）そのものに 関する変遷・出来事	祇園祭（観光・交通政策含む）に 関連する動き・出来事	京都を中心とした社会情勢（社会運動） 等の動き・出来事
1945 (昭和20)			8月 15日、敗戦。 9月 26日、古領軍京都進駐開始（司令部は四條烏丸大建ビル） 11月 京都帝国大学出身者を中心に日本史研究会が発足。
1946 (昭和21)	7月 祇園囃子奉納。また御旅所の提灯に灯がともる。	8月 16日、大文字送り火が復活。 10月 京都市観光連盟創立。	2月 民科京都支部創立。 5月 1日、御所建礼門前などで戦後初のメーデー。 6月 1日、京都人文学園創立。 9月 28日、部落解放同盟京都府連合会結成。 11月 3日、日本国憲法が公布。
1947 (昭和22)	7月 戦後初の長刀鉾の稚児選出（5年振り）、八坂神社社参。 宵山（16日）復活。 山鉾巡行も5年振りに復活。ただし、前祭（17日）のみの復活で、長刀鉾・月鉾が参加。月鉾は居祭となり巡行は長刀鉾のみ。また白楽天山など一部の山が懸想品を町家に飾る。 【前祭・巡行路】 9時頃町内（四條烏丸東行）→四條寺町（西行）→町内 神輿渡御も同じく5年振りに復活。	4月 京都市に「観光課」が復活。観光局長がGHQに祇園祭の復活をかけあい、大方の予想を覆して了承を得る。	4月 5日、戦後初の公選制による知事選・市町村選挙が行われる。府知事は官選時に一度府知事経験のある木村悖が、京都市長は前関西大学長だった神戸正雄が、共に無所属で当選。 5月 3日、日本国憲法が施行。 7月 1日、京都労働学校創立（翌年12月まで）。
1948 (昭和23)	7月 神輿洗い神事（10日）が6年振りに復活。（前年の長刀・月鉾に代わり）船鉾と北観音山の2基復活、巡行参加（船鉾は進駐軍に配慮し神功皇后御神体を乗せず）。 【前祭・巡行路】 13時頃四條新町（東行）→四條寺町（西行）→各町内		1月 国民的歴史学運動の嚆矢となる石母田正の論考「村の歴史・工場の歴史」が『歴史評論』12号誌上に掲載（国民的歴史学運動の中で紙芝居『祇園祭』が制作）。 4月 1日、同志社、立命館大学が新制大学として発足。 9月 18日、全日本学生自治会総連合（全学連）結成。
1949 (昭和24)	5月 鶏鉾、鯉山（この時点ではまだ巡行復活前）の懸想品が国の重要文化財に指定。 7月 戦後初めての「くじ取り式」（鈴木治兵衛氏宅）。 山鉾巡行に長刀鉾・木賊山・芦刈山・函谷鉾・油天神山・郭巨山・放下鉾・太子山・岩戸山の9基復活。 【前祭・巡行路】 13時頃四條烏丸（東行）→四條寺町（西行）→各町内。 ※山5基は四條寺町を越え、四條河原町まで行き帰る。 京都観光連盟、清々講社が戦後初めて補助金を交付。		民科京都支部歴史部会発足。 2月 全学連の京都支部（京都府学連）が結成。 4月 府立西京大学（現・京都府立大学）、京都工芸繊維大学、京都学芸大学（現・京都教育大学）、京都薬科大学、種智院大学、佛教大学、花園大学、京都女子大学、同志社女子大学、龍谷大学、大谷大学が新制大学として発足。 5月 7日、京都府教職員組合（京教組）結成。 8月 京都市交通局職員の大量解雇が行われる（事実上のレッド・パーシ）。以降、京都府内で民間企業、公務員問わずレッド・パーシにより組合関係者らが職を追われる。
1950 (昭和25)	7月 後祭（24日）が復活。前祭には、長刀鉾・山伏山・白楽天山・函谷鉾・霰天神山・郭巨山・月鉾・占出山・船鉾の9基（鉾4基、山5基）が、後祭には、北観音山・橋弁慶山・役行者山・八幡山・黒主山・鈴鹿山・南観音山の7基（すべて山）が参加。全28基（当時）中、16基の参加を得る。 【前祭・巡行路】 13時頃四條烏丸（東行）→四條河原町（西行）→各町内 【後祭・巡行路】 ※戦前と同じ 10時頃三条烏丸（東行）→三条寺町（南行）→四條寺町（西行）→四條烏丸→各町内	6月 林屋辰三郎の論考「町衆の成立」が『思想』312号誌上に掲載（後の祇園祭イメージに影響を与える）。 7月 2日、金閣寺焼失。 8月 白川書院より雑誌『京都』創刊。 12日、清々講社と観光連盟が中心となり「祇園会山鉾巡行委員会」が発足。 9月 15日、祇園会山鉾巡行委員会が「祇園会山鉾巡行協賛会」へと改称。 10月 時代祭、鞍馬火祭が復活。 22日、（8月に住民投票を経たのち）「京都国際文化観光都市建設法」が施行。	1月 日本共産党、所感派と国際派とに内部が二分される。 16日、日本社会党が分党（旧労働農民党・日本無産党の流れを汲む左派と旧日本労働党・社会民衆党の流れを汲む右派の対立。ただし同年4月3日には統一する）。 25日、四條河原町公衆会館で民統（全京都民主統一戦線）が結成大会を開き、社会党系・共産党系の革新団体が参加（ただし、6月の参議院選挙以降、社・共の亀裂が深まり次々と参加団体が脱退。同年中に自然消滅）。 2月 8日、弁護士の高山義三が民統の推薦、社会党の公認を得て京都市長に初当選（ただし、同年10月には共産党と対立、翌年の訪米後は立場を保守へと転じる）。 4月 京都市立美術大学（現・京都市立芸術大学）設立。

					20日、元京都帝大教授で前中小企業庁長官だった蛭川虎三が民統推薦、社会党公認で京都府知事に初当選。		
				6月	25日、朝鮮戦争が勃発（～1953年7月27日休戦）。		
				8月	10日、警察予備隊発足。		
1951 (昭和26)	各鉦町へ祇園会山鉦巡行協議会が補助金を交付。また京都市からも補助金を交付（三和銀行からの貸入金含む）。これにより、全基の巡行が可能に。	京都への観光客がこの頃より急増。	5月	20日、歴史学研究会大会開催（国民的歴史学運動の影響が強く出る。大会テーマ「歴史における民族の問題」）。			
	7月	10日、鉦建中の月鉦が転倒。巡行不参加に（なお、この転倒は月鉦に女性を乗せたから、との風説が一部で広まる）。月鉦を除く27基が参加（前祭には長刀鉦・木賊山・郭巨山・保昌山・函谷鉦・占出山・油天神山・孟宗山・鶏鉦・白楽天山・芦刈山・伯牙山・放下鉦・山伏山・叢天神山・太子山・岩戸山・船鉦の18基（鉦5基、山13基）が、後祭には北観音山・橋弁慶山・浄妙山・八幡山・役行者山・鯉山・鈴鹿山・黒山・南観音山の9基が参加）。また巡行路も戦前と同じルートに戻ることにとなる。	3月	8日、京都府・京都市の観光連盟が統合され「京都観光連盟」となる。			
			10月	林屋辰三郎の論考「郷村成立期に於ける町衆の文化」が『日本史研究』14号誌上に掲載。			
				7月	27日、総評京都地方評議会結成。 30日、中日友好協会秋田県連により『花岡ものがたり』が作成される（国民的歴史学運動の一環として）。		
				7月	14日、京都大学同学生会主催の総合原爆展が京都駅前の丸物百貨店で開催（日本初の原爆展）。		
				9月	8日、サンフランシスコ平和条約に署名、批准（翌年4月28日発効）。同日、日米安全保障条約に署名。		
				10月	東京大学教養部学生歴史学研究会が紙芝居『山城国一揆』を作成、駒場祭で上演（国民的歴史学運動の一環）。		
					16日、日本共産党第5回全国協議会（五全協）が開かれ、所感派による「51年綱領」が採択される（反米愛国路線の綱領であり、「山村工作隊」や「中核自衛隊」などの組織が作られることとなる）。		
					24日、サンフランシスコ平和条約をめぐり、全面講和以外は認めないとする日本社会党左派（鈴木茂三郎ら）と単独講和やむなしとする日本社会党右派（浅沼稲次郎ら）とが対立し、社会党は再度左右に分党する。		
				11月	12日、昭和天皇の京都大学来学に際して混乱が起き、天皇へ公開質問状を提出しようとした京都大学同学生会には解散処分がくだされ、また同学生会幹部学生8名は無期停学処分となった（いわゆる京大天皇事件）。		
				12月	京都市衛生課嘱託職員が『オール・ロマンス』誌10月号に発表した小説「特殊部落」を巡り部落解放同盟京都府連が京都市を糾弾。翌年から同和事業予算が大幅に増えることに（いわゆるオール・ロマンス事件）。		
1952 (昭和27)	7月	菊水鉦が再建に向けて着工（再建願主・松本元治）。お迎え提灯（10日）が80数年振りに復活。戦前からあった28基の山鉦に加え、屋根など未完成だった菊水鉦上半部を台車に乗せて巡行参加。 【前祭・巡行路】 ※9時頃出発。前年と同じ。 【後祭・巡行路】 ※9時半頃出発。前年と同じ。	4月	京大・立命館学生ら紙芝居『祇園祭』創作開始。	3月	石母田正『歴史と民族の発見』東京大学出版会刊行。	
			5月	5日、紙芝居『祇園祭』、歴史学研究会大会（20周年記念会。大会テーマ「民族の文化について」。於・東京大学）にてレクリエーションの一貫として披露される（血のメーデー事件の直後）。前年度に続き、国民的歴史学運動に基づく研究発表がなされる。	4月	京都府立医科大学が新制大学として発足。	
				11月	22日、京都市の働きかけにより祇園祭が国の無形文化財に指定。	5月	1日、メーデー参加者が皇居前広場へ流れ込み、警官隊と衝突。死傷者を出す（いわゆる血のメーデー事件）。
					7月	21日、破壊活動防止法（破防法）施行。	
					8月	加藤文三らを中心とした東京立命館大学歴史学研究会メンバーらによる小冊子『石間のわるしぶき』が作成される（国民的歴史学運動の一環として。なお、この小冊子は石母田正に激賞される）。	
					10月	『歴史評論』6号に「国民的科学的創造のために」と題した国民的歴史学運動の特集号が組まれる。	
1953 (昭和28)		京都市が本格的に山鉦巡行の補助に乗り出す。	2月	紙芝居『祇園祭』作成に携わった石田善人（当時同志社大助手）の論考「新しき歴史学の具体化のために」が『新しい歴史学のために』13号誌上に掲載（紙芝居の方法的限界とより国民的歴史学運動に根差すものへの転換が論じられる）。	5月	黒田俊雄による論考「[国民的科学的]の問題と歴史研究」が『新しい歴史学のために』29号誌上に掲載（国民的歴史学運動への批判として）。	
	6月	菊水鉦の完工祭開催。88年振りの再建となる。					
	7月	無形文化財指定を受けて「くじ取り式」が戦後初めて京都市役所で行われる。10日、祇園東新地お茶屋組合主催「祇園会ねりもの」復活（18年振り）。	3月	御池通の拡張工事が完了。 祇園会山鉦巡行協議会が祇園祭絵がき販売開始。	8月	14日、南山城大水害発生。 16日、岡山県飯岡村（現・美咲町）で岡山大助手の近藤義郎らを中心に地元住民、学生らによる発掘調査が行われ（～12月）、結果として月の輪古墳が	

		<p>【前祭・巡行路】 ※雨天。9時頃出発。例年と同じ。</p> <p>【後祭・巡行路】 ※9時頃出発。前年と同じ。</p>	<p>5月 葵祭復活。</p> <p>7月 紙芝居『祇園祭』が解説付きで書籍化（民科京都支部歴史部会編『祇園祭』東京大学出版会〔解説・林屋辰三郎〕）。</p> <p>8月 4・5日に札幌市で開催された第五回京都染物見市に長刀鉦囃方が出張。</p> <p>9月 祇園会山鉦巡行協賛会が「祇園祭協賛会」に改称。 林屋辰三郎『中世文化の基調』東京大学出版会刊行。</p>	<p>11月 11日、京大生と警官隊とが荒神橋で衝突（いわゆる荒神橋事件）。</p> <p>12月 5日、京都市北区にある旭丘中学校で京教組に加盟している教員らの授業が「偏向教育」だとして保守系父母らが訴え、学校を二分する争いに（いわゆる旭丘中学校事件）。</p> <p>8日、立命館大学で「わだつみ像」除幕式。</p>
1954 (昭和29)	7月	<p>NHKで山鉦巡行の様子が実況放映（全国放送）。</p> <p>【前祭・巡行路】 ※9時頃出発。例年と同じ。</p> <p>【後祭・巡行路】 ※9時頃出発。例年と同じ。</p>	<p>京都への観光客数が700万人を超える。</p> <p>1月 雑誌『京都』が『東京と京都』へ改称。</p> <p>5月 祇園祭ポスターが初めて作られ（3000部）、各都市に掲出依頼をするなど、宣伝に力を入れ始める。</p> <p>文化財保護法の改定に伴い、1952年の「祇園祭」無形文化財指定が白紙状態に戻る。</p>	<p>前年の月の輪古墳発掘がスライド・記録映画となる。</p> <p>2月 5日、無所属となった高山が保守勢力から支持を得て京都市長選に勝利し二期目に入る。</p> <p>4月 16日、嵯川虎三が左右社会党、共産党の支援を受け再選（二期目）。</p> <p>8月 4日、第1回原水爆禁止世界大会が開催される。</p>
1955 (昭和30)	7月	<p>前祭の巡行路変更がほぼ決定的となるも、インフラ面での整備などが間に合わず、例年通りの開催に。</p> <p>【前祭・巡行路】 ※9時頃出発。例年と同じ。ただし、函谷鉦は車の破損から四条寺町で引き返し、松原通を巡行せず。</p> <p>【後祭・巡行路】 ※9時頃出発。例年と同じ。</p>	<p>1月 24日、山鉦巡行路変更協議が開催（観光局主催）。出席者は、高原美忠（八坂神社宮司）・鈴木日出年（八坂神社権宮司）・古川俊治郎（祇園会山鉦連合会会長）・柴田實（京都大学教授〔歴史学〕）・林屋辰三郎（立命館大学教授〔歴史学〕）・出雲路敬和（成安女子短大教授〔歴史学〕）・田中緑江（郷土史家）の各氏と京都市観光局。</p> <p>前祭巡行路の松原通は狭く、多数の観光客が観覧するには人家に及ぼす影響や不慮の事故の可能性から、京都観光連盟や京都商工会議所などから改善が求められ、京都市としても変更を行いたい旨が説明される。一方、八坂神社側は強く反発。以降、新聞紙上で「信仰」か「観光」かで議論されることに。※なお、この時点ですでに京都市側は前祭・後祭の合同巡行の構想も表明している。</p> <p>6月 10日～20日、東京大丸で京都市主催の「京都祇園祭展」開催。月鉦を東京八条得八重洲口広場に建てる（月鉦は昭和8年にも東京高島屋で建てられている）。</p> <p>22日、八坂神社境内清々館にて、山鉦巡行路変更の可否を問う祇園会（現・祇園祭）山鉦連合会臨時総会が開催。結果、1年（1955）限りの年限付きで新巡行路にすべきという意見が賛成多数（22/29票）で可決される。しかし、整備などの問題で55年中の実施は不可能となり、次年度に持ち越す。</p> <p>9月 鈴木良による論考「幻燈「祇園祭」と僕達の問題」が『新しい歴史学のために』30号誌上に掲載（紙芝居『祇園祭』の限界について論じる）。</p>	<p>7月 29日、日本共産党第六全国協議会（六全協）開催。所感派主導の運動方針が批判され転換。国民的歴史学運動と関連していた「山村工作隊」などは解体され、国民的歴史学運動自体も批判。衰退することに。</p> <p>8月 27日、部落解放全国委員会が部落解放同盟へと改称。</p> <p>10月 13日、左右に分党していた日本社会党が再統一。</p> <p>11月 15日、自由党と日本民主党が保守合同のもと合併。自由民主党が結成される。当初は鳩山一郎（民主党総裁）、三木武吉（民主党総務会長）、緒方竹虎（自由党総裁）、大野伴睦（自由党総務会長）の四名が総裁代行を務めた（翌年4月、鳩山が初代総裁となる）。</p>
1956 (昭和31)	7月	<p>前年より議論されてきた前祭の巡行路が変更される。なお御池通には京都市観光連盟主催の有料観覧席が設けられる（3900席）。また注連縄切りの場所が四条御幸町から寺町四条上ルに変更。</p> <p>【前祭・巡行路】 9時頃四条烏丸（東行）→四条寺町（北行）→寺町御池（西行）→烏丸御池→各町内</p> <p>【後祭・巡行路】 ※9時頃出発。例年と同じ。</p> <p>江戸中期以降、廃絶していた「鷲舞」が木村正雄（狂言師）により復活。再び奉納されるように（木村は中世期に祇園社から伝えられたとする山口・津和野での鷲舞を習得）。</p>	<p>2月 16日、山鉦連合会臨時総会にて、観光客を新たに誘致するため、またその観光客からみた利便性や事故の予防のため、といった観点から、満場一致で前祭の巡行路変更を承認。</p> <p>6月 18日、八坂神社清々館にて、祇園祭協賛会理事会が開催。前祭巡行路変更が満場一致で承認される。</p> <p>10月 1日、京都市、十八の社寺と二条城を対象とした、文化観光施設税導入（時限立法）。</p> <p>26日～翌月6日まで名古屋・中村百貨店で京都観光連盟主催の展覧会開催。長刀鉦を百貨店屋上に建て、鶏鉦、鯉山の懸想品などを出展。好評を得る。</p>	<p>3月 中塚明の論考「[村の歴史・工場の歴史]の反省」が『講座歴史Ⅰ 国民と歴史』に掲載。国民的歴史学運動への批判が示される。</p> <p>6月 23日、民科第11回全国大会が開かれ、事実上、民科は解体する（民科解体後、民科京都支部歴史部会は、京都歴史民科部会に名称を変更し、活動を継続）。</p> <p>9月 1日、京都市が政令指定都市となる</p> <p>11月 20日、憲法擁護国民連合京都支部結成。</p> <p>12月 18日、国連総会にて日本の国連加盟が承認される。</p>

1957 (昭和32)	7月	山鉦巡行復活10周年のイベントとして前祭と後祭の間の8日間にわたり、能や狂言、郷土芸能、盆踊り大会、花火大会などの記念行事が行われた。また、前祭参加鉦である菊水鉦が後祭まで常設、祇園囃子の演奏が連日行われた。	6月	山鉦巡行10周年記念として専売公社から記念ピース(たばこ)が販売される。	3月	30日、京都人文学園と京都勤労者教育協会とが統一され、京都勤労者学園(現・ラポール学園)が創立。
		祇園東新地お茶屋組合による「祇園会ねりもの」が再開される(4年振り)。巡行は前年同様。 【前祭・巡行路】 ※8時頃出発。前年と同じ。 【後祭・巡行路】 ※9時頃出発。例年と同じ。	7月	1日、祇園祭音頭が日本コロムビアからレコード化される(鳥倉千代子・山形英夫:歌)。	6月	27日、原水爆禁止京都協議会(京都原水協)結成。
			8月	29日、京都学生相談所より山鉦連合会に対して、学生アルバイトの扱いに対する要望書が提出される。		
1958 (昭和33)	7月	巡行は前年同様。 【前祭・巡行路】 ※9時頃出発。例年と同じ。 【後祭・巡行路】 ※9時頃出発。例年と同じ。 有料観覧席の主宰が京都観光連盟から山鉦連合会へ。		国庫補助金を得て、京都府・京都市・祇園祭協賛会・山鉦連合会が、「京都八坂神社祇園祭記録書」を作成、文化財保護委員会に提出する(調査委員長・柴田實)。	2月	2日、自民党京都府連の推薦など前回同様保守勢力の支持を受けた高山が京都市長選挙に勝利し三期目に。
					4月	11日、嵯峨川虎三が京都府知事選挙に勝利し、三期目。このとき、自民党府連からも推薦を受けたことに共産党が反発。別候補者(河田賢治)を擁立。
1959 (昭和34)	6月	金銭トラブルにより岩戸山町の町会所が一時的に使用不可の状態になる(巡行には参加)。	3月	京都への観光客数が1000万人を超える。	4月	京都外国語大学設立。
		7月	巡行は前年同様。 【前祭・巡行路】 ※小雨。9時頃出発。例年と同じ。 【後祭・巡行路】 ※9時頃出発。例年と同じ。	10月	北海道・札幌の五番館百貨店の招きで菊水鉦が百貨店の前に展示される。	5月
1960 (昭和35)	7月	岩戸山町の町会所が使用できず、岩戸山の部材を取り出すことが不可能となり、巡行参加を断念。 「祇園会ねりもの」3年振りに復活。しかし以後、途絶える(1893(明治25)年にも一度途絶え、1936(昭和11)年に復活。その後は、1953、54、57年に開催。この年のルートは 16時茶屋組合 → 富永町大和大路 → 三条大橋 → 三条木屋町 → 市役所前 → 寺町御池 → 四条寺町 → 四条河原町 → 南座前 → 祇園石段下 → お茶屋屋組合(終了23時)。 巡行は前年同様。 【前祭・巡行路】 ※9時頃出発。例年と同じ。 【後祭・巡行路】 ※9時頃出発。例年と同じ。 有料観覧席に指定席(1000人分)が設置される。	5月	京都市観光協会設立。	1月	19日、訪米していた岸総理が日米新安保条約に調印。
		7月	三和銀行で「祇園祭資料展覧会」が催される。	2月	21日、民主社会党京都府連合会結成。	
		8月	12日、祇園祭終了後の反省会で、前祭の寺町巡行は道路が狭隘で巡行し辛いこと、広告看板などに鉦が当たり、トラブルに発展するケースが考えられること、交通整理が難しいこと、多くの観光客が巡行を見られないこと、などを理由に巡行路の変更を求める意見が出る(八坂神社も最終的に同意)。	5月	19日、衆議院日米安全保障条約特別委員会にて新条約案が強行採決される(採決に際しては、座り込みを続ける社会党議員らを排除するため、警官隊だけでなく右翼団体構成員へも動員をかける)。 20日、前日の特別委員会に続き、衆議院本会議においても強行採決の末、可決。 連日、国会前を始め全国各地で安保反対デモが発生。デモ隊は機動隊や右翼団体構成員らと衝突を繰り返す。	
		11月	26日、山鉦連合会総会にて、前祭巡行路について寺町通から河原町通への変更を満場一致で可決。市長や市議長に決議書と陳情書を提出。	6月	10日、アイゼンハワー大統領訪日調整のため来日したハガティ大統領報道官を乗せた車が空港周辺でデモ隊に取り囲まれ、ヘリコプターで救助される(いわゆるハガチ事件)。 15日、国会議事堂正門前にてデモ隊と機動隊、右翼団体構成員らが衝突。東大生の榎美智子が圧死。その他、多数の負傷者が出る。 19日、新安保条約、参議院未議決のまま自然成立。 23日、新安保条約批准書交換後、岸内閣総辞職。	
		12月	8日、山鉦巡行路変更を要請する陳情書が寺町専門店会・寺町京極商店街・河原町商店街連合会・京都商店連盟・山鉦連合会の連名で市議会議長に提出される。	10月	12日、浅沼稲次郎社会党委員長が暗殺される。	
1961 (昭和36)	7月	岩戸山町の町会所問題。前年と同様に問題は解消せず、巡行参加を見送る。 前年の議論を受け、前祭の巡行路を変更する。 【前祭・巡行路】 9時四條烏丸(西行) → 四條河原町(北行) → 河原町御池(東行) → 烏丸御池 → 各町内 【後祭・巡行路】 ※9時頃出発。例年と同じ。	2月	西口克己による小説「祇園祭」中央公論社刊行。	4月	ノートルダム女子大学(現・京都ノートルダム女子大学)設立。
			7月	31日、京都市電北野線廃止。	7月	9日、第7回原水禁にてソ連の核実験をめぐり、いかなる国の核実験も反対という立場の社会党・総評系とソ連の核実験やむなしの立場をとる共産党系とが対立。
			8月	阪急京都本線の延長工事(終着を大宮駅から河原町駅まで延長)着工。	10月	26日、日教組、中学校学力テスト反対闘争を組織。京教組も闘争開始(12月には府教委による処分者も出る)。 11月
1962 (昭和37)		阪急から各鉦町に、山鉦巡行に関する様々なテスト結果(右項目参照)を各鉦町に伝達。その結果、函谷鉦・鶏鉦・船鉦が巡行不参加を表明。	5月	23日、山鉦29基が国の重要有形民俗資料(後に重要有形民俗文化財と改称)に指定。27日深夜、前年から続く阪急京都本線の延長工事のため、鉄板敷設の仮舗装であっ	2月	1日、これまで同様、保守勢力の支持を受けた高山が京都市長選挙に勝利し四期目に入る。
					4月	1日、1950年代から相次ぐ台風や水害

	7月	函谷鉦を除く28基の山鉦が建てられ居祭りを（岩戸山も和解が成立、山が建てられた）。なお、鷄鉦・菊水鉦・放下鉦の3基は前祭の日に町内を巡行、北観音山・南観音山の2基は後祭の日に同じく町内を巡行。 青山などは通常通り行われた。	た四条通（堀川－河原町間）で、山鉦巡行に支障が出ないかを確かめるため、山鉦連合会と阪急が月鉦を建てる。さらのその上に鉄材などを載せて14トン（巡行時は約12トン）にして巡行できるかを試みる結果、鉄板よりも鉦の車輪に損傷が出ることが判明（月鉦の車輪はすぐに修理となった）	8月	6日、第8回原水禁。社会党・総評のソ連核実験再開抗議動議で紛糾。宣言未採択で終了（分裂不可避に）。	
			6月	林屋辰三郎『京都』が岩波書店から刊行。 13日、山鉦連合会総会にて、(1)現状の四条通では全く危険がないとは断言できない、(2)重要民俗資料指定されたばかりで、山鉦をいためたくない、(3)山鉦巡行を執行すると阪急の工事も遅延する、といった理由によりこの年の巡行中止（居祭り）を決定。 14日、丹後半島一周道路が完成。	10月	14～28日、キューバに核ミサイルが配置されたことによる米ソ対立が危機的状況を迎える（いわゆるキューバ危機）。
			7月	15日、山鉦連合会は「山鉦文化財調査会」を設置し、龍村謙（文部省文化財専門委員）、梅村次郎（京都国立博物館次長）により調査開始。		
1963 (昭和38)	7月	3年振りに29基揃っての巡行。ただし、以前から問題となっていた山鉦の曳き手不足が深刻となり巡行が遅れたほか、昇き山であるはずの保昌山が曳き手不足を補うため車輪をつけての巡行となった。重要有形民俗文化財に指定されている昇山がその形態を変えることについて議論となる。 巡行は一昨年同様。 【前祭・巡行路】※9時頃出発。二年前と同じ。 【後祭・巡行路】※9時頃出発。例年と同じ。 有料観覧席が山鉦連合会と京都市観光協会の共催に。	3月	31日、社寺の文化財保護に府独自の補助金交付へ。	8月	5日、第9回原水禁に社会党・総評系が不参加を表明。それに先立って、京都原水協でも分裂状態に。結果、社会党・総評系は独自の集会を開催し、原水禁が分裂。
			6月	17日、阪急大宮－河原町間で地下鉄区間開通。		
			7月	15日、名神高速尼崎－栗東間が開通。		
			9月	市バスの値上げが臨時京都市議会で可決。	11月	15日、府立総合資料館開館。
			10月	1日、近鉄が奈良電鉄を合併。近鉄京都線に。	22日、ケネディ大統領暗殺。	
1964 (昭和39)	7月	多くの昇山が保昌山にならって車輪をつける（前祭で車輪をつけなかったのは、郭巨山・伯牙山・叡天神山・太子山の4基、後祭で橋弁慶山・浄妙山・鈴鹿山の3基のみ）。このため山鉦連合会が京都府・京都市・文化財保護委員会に現状変更許可を得るため、交渉。結果、昇山本来の姿を損なわず、人目の多いところではかつぐことが条件に、許可される。 巡行は例年同様。 【前祭・巡行路】※9時頃出発。例年と同じ。 【後祭・巡行路】※9時頃出発。例年と同じ。	3月	20日、開園した伏見桃山城キャッスルランド内に伏見桃山城天守閣（鉄筋コンクリート製）が再現。	4月	1日、光華女子大学（現・京都光華女子大学）設立。 28日、沖繩返還京都大集会が開催される。
			9月	1日、京都市は文化観光施設税に代わり文化保存特別税（時限立法）を制定。	5月	15日、前年に米英ソ間で調印・発効した部分的核実験禁止条約が衆議院で議決。中国寄りで批准反対派が占めていた共産党内でソ連支持派の志賀義雄や鈴木市蔵らは賛成の意を示し除名。志賀・鈴木らは「日本のこえ」結成（同年7月）。
			10月	1日、東海道新幹線開通。 同日、京都市美術館で船鉦・橋弁慶山が建てられる		
			12月	25日、景観上問題もあり反対の声も多い中、京都タワービル完成。	8月	3日、社会党・総評系による原水禁大会が広島・長崎で開かれ、一方、京都原水禁は嵐山公園で原水爆禁止8.3京都平和大会を開く。
					11月	17日、公明政治連盟を改組し公明党結成。
1965 (昭和40)		車輪をつけない昇山は3基に（郭巨山、橋弁慶山、鈴鹿山）	4月	1日、京都府文化財保護基金財団が発足。	1月	15日、部落解放同盟朝田派による府連大会開催。前年12月に開催された府連大会（共産党系主体）は無効との意思が解放同盟中央からくだる。これにより解放同盟京都府連は分裂。同月20日には事務所明け渡しを求め朝田と拒否する共産党系とで争いが勃発（いわゆる文化厚生会館事件）。
	6月	30日、京都府警より安全上の問題により巡行中の「粽投げ」を止めるように申し入れあり。しかし、自粛するということで禁止にはならず。	6月	後祭を行う山鉦町より前祭との格差に不満が噴出。以前より取り沙汰されていた前祭・後祭の合同巡行が現実味を帯びた議論となる。結果、鈴鹿山を除く後山8基が前祭に合流する態度を見せたため、合同巡行が決定的に。	2月	1日、社会党・総評などが原水爆禁止日本国民会議（原水禁）を結成。
	7月	鷄鉦が収蔵庫問題で巡行不参加を表明も、撤回。 巡行は例年通り。 【前祭・巡行路】※小雨。9時頃出発。例年と同じ。ただし、孟宗山の交通標識衝突、長刀鉦での転落事故あり。 【後祭・巡行路】※9時頃出発。例年と同じ。 有料観覧席が全席指定席になる。			4月	1日、京都産業大学設立。 24日、ベトナムに平和を！市民連合（ベ平連）結成。
					5月	22日、京都べ平連結成。
1966 (昭和41)	7月	合同巡行に反対した鈴鹿山のみ不参加の中、28基が揃って17日に巡行。 【合同巡行路】※9時頃出発。巡行路は前祭と同じ。	1月	京都市が京都工芸繊維大学建築工学教室に依頼し、山鉦の実測調査が行われる。 山鉦連合会総会にて(1)交通事故から守るための大規模な交通規制は1日で充分	2月	1日、市長4期16年務めた高山の後継候補・井上清一（前自民党参議院議員）が自民党推薦で市長選勝利。 16日、文化厚生会館事件以降の共産党

		<p>なお、先頭の長刀鉦が烏丸御池に到着したところ、最後尾の南観音山は巡行を出発したばかりであったが、それでも当初の予想より早く、14時には巡行を終えた。</p> <p>24日、後祭に代わり、八坂神社関係者の尽力によって「花傘巡行列」が開始。</p>	<p>であること、(2)後祭の山鉦巡行は寂しく、担当者の意欲を損なう可能性あり、(3)衣料関係業者が多いなかで、商戦が変化し後祭のころは非常に多忙を極める、などの理由により合同巡行を賛成多数で決定(鈴鹿山は反対)。</p> <p>13日、古都保存法が成立。</p>	<p>系と解放同盟京都府連との対立を受けて、部落問題研究所所長・奈良本辰也(立命館大学教授)、理事・林屋辰三郎(立命館大学教授)、理事・原田伴彦(大阪市立大学教授)、理事・上田一雄(大阪市立大学教授)が研究所を去る。</p> <p>4月 12日、社会党・共産党の支援を受けた蟻川が京都府知事選挙に勝利し5期目に(民社党府連は支持を巡り分裂)。</p> <p>5月 21日、国立京都国際会館開館(日本初の国会議施設)。</p>
1967 (昭和42)	7月	<p>前年、巡行に反対した鈴鹿山も参加し、すべての山鉦が初めて合同で巡行。</p> <p>【合同巡行路】※9時頃出発。前年と同じ。</p>	<p>この年から5年間にわたり、山鉦町の祭具調査が行われる(京都市・京都国立博物館などが主体)。</p> <p>3月 京都市文化観光局文化課編『祇園祭一戦後のあゆみ』刊行。</p> <p>4月 20日、国道1号線東山バイパスが開通。</p> <p>10月 2日、府議会、映画『祇園祭』の制作協力を可決。</p>	<p>1月 6日、府警観覧式で井上京都市長が倒れ2日後に死去。</p> <p>2月 26日、井上市長の急死に伴い市長選挙が行われる。社会党・共産党が支持した前京都府医師会会長の富井清が自民党・民社党の支持候補を破り当選。府・市共に革新首長に。</p> <p>4月 15日、社会党・共産党が支持した美濃部亮吉が都知事選に初当選。革新都政に。</p> <p>6月 12日、新潟水俣病患者ら、新潟地裁に提訴。</p> <p>9月 1日、四日市ぜんそく患者ら、津地裁に提訴。</p> <p>10月 16日、ベトナム反戦週間として大規模な反戦集会在米国各地で開かれる。</p> <p>20日、橘女子大学(現・京都橘大学)設立</p>
1968 (昭和43)	7月	<p>宵山の出人分散をはかるため、この年より13-16日を「祇園はやし期間」に設定。</p> <p>巡行は例年通り。</p> <p>【合同巡行路】※9時頃出発。前年と同じ。</p>	<p>多くの山鉦で山や鉦の保管場所が問題となっていることを受け、八坂神社東、円山公園内に「祇園祭山鉦館」を建設。(2015年現在、木賊山・芦刈山・伯牙山・郭巨山・油天神山・浄妙山・黒主山・孟宗山・岩戸山の10基が保管)。</p> <p>祇園囃子の保存事業が開始される。この年は各囃子をテープに録音する作業が行われる。</p> <p>祇園山鉦連合会編『近世祇園祭山鉦巡行史』刊行。</p> <p>京都市文化観光局文化課編『祇園祭一山鉦実測』刊行。</p> <p>10月 映画『祇園祭』のクライマックスシーン撮影のため、新丸太町通(当時、延伸工事中)にてレプリカの長刀鉦と共に、菊水鉦や放下鉦など8基の山鉦が巡行する様子が撮影。</p> <p>11月 23日、中村錦之助主演の映画『祇園祭』(原作・西口克己の同名小説)が封切り。大ヒットする(1週目動員数は67,306人。翌2月まで公開)。</p> <p>12月 『キネマ旬報』12月1日号(484号)で、映画『祇園祭』で当初監督を務める予定であった伊藤大輔(関係者との意見衝突で、公開直前に降板)が「『祇園祭』始末」を掲載。製作陣を批判(以後、同誌上で当事者同士の論争が起こる)。</p> <p>『キネマ旬報』12月15日号(485号)号で、映画『祇園祭』の脚本を担当した鈴木尚之・清水邦夫が「私たちの反論―『祇園祭』始末』の虚妄を衝く―」を掲載。前号伊藤の文章に真っ向から反論。</p>	<p>1月 29日、東大医学部学生大会にて登録医制度反対や研修医の待遇改善を求めた無期限ストが決議。以後、安田講堂の一時占拠や、東大全共闘が結成されるなどして、他学部も次々に無期限ストへと突入(いわゆる東大紛争)。</p> <p>3月 9日、イタイイタイ病患者ら、富山地裁に提訴。</p> <p>4月 1日、チェコスロバキアにて自由化政策が開始(いわゆるプラハの春)。</p> <p>4日、米国にてキング牧師が暗殺される。</p> <p>5日、小笠原諸島返還協定が調印される。</p> <p>10日、フランスにて大学の民主化を求めるソルボンヌ大学の学生らがカルチェ・ラタンをバリケードで封鎖し占拠(いわゆる五月革命)。日本の学生運動にも影響を与える。</p> <p>23日、日本大学にて、大学側の不正経理問題に端を発した学生デモが行われる。以後、日大全共闘が結成され、同年9月30日には「大衆団交」が行われる(いわゆる日大紛争)。</p> <p>10月 21日、国際反戦デー。各地で反戦集会、デモが開かれる。京都では民青系全学連、三派(中核・社学同・反帝学評)府学連が集会とデモを行う。東京では新宿駅を非民青系学生が占拠し機動隊と衝突(いわゆる新宿騒乱)。</p> <p>12月 12日、立命館大学新聞社の『立命館学園新聞』紙面で批判を受けた同大学学友会執行部(及び支持者)らが新聞社に詰めかけ、一斉に入社希望を出し紛糾。民青系学生と非民青系学生の全学的対立へ発展(京都における大学紛争の初発)。</p>
1969 (昭和44)	7月	<p>巡行は例年通り。</p> <p>【合同巡行路】※9時頃出発。前年と同じ。</p>	<p>1月 『キネマ旬報』1月1日号(486号)で、映画『祇園祭』に初期から携わった竹中労が「まぼろしの祇園祭」を掲載。</p> <p>2月 『キネマ旬報』1月15日号(487号)に、竹中労「続まぼろしの『祇園祭』」を掲載。なお、同号には一連の論争に関する評論家や新聞記者、製作者の発言が寄稿されている。</p> <p>4月 『キネマ旬報』2月15日号(489号)号で、</p>	<p>1月 16日、京都大学で学生部が封鎖され大学紛争に(同年9月封鎖解除)。また立命館大学でも封鎖が始まる。</p> <p>18日から19日かけて、前年7月からバリケード封鎖されていた東大安田講堂に機動隊が突入し、学生らを排除。東大紛争は終息に向かう(なお、入試は中止)。</p> <p>2月 11日、府立医科大で無期限ストを決行</p>

			伊藤が「再説「祇園祭」始末」掲載。 5月 『キネマ旬報』4月1日号(492号)で 大島渚が「主体者の責任を問う」と題 してこの間の論争に関与した人々を批 判。 雑誌『東京と京都』が再度、『京都』 へと改称。	(なお、67年より度々、ストなどが行 われていた)。また翌日には大衆団交 の場をめぐり教授会と学生らが対立。 記念講堂内に集まった教員らを学生ら が5日間、閉じ込める(学生らは教員 が団交に応じないための籠城作戦と非 難)。学内の封鎖も続くなか、3月21日 に機動隊突入、封鎖解除。
				4月 1日、京都市立美術大学と市立音楽短 期大学(1952年設置)が統合され、京 都市立芸術大学が設置される。
				28日、沖縄デー京都集会在分裂。
				5月 20日、立命館大学に機動隊が突入。混 乱のさなか、わだつみ像が非民青系学 生らにより破壊される。
				6月 14日、水俣病患者ら、熊本地裁に提訴。
				7月 21日、アポロ11号、初めて月面に着陸。
1970 (昭和45)	7月	巡行は例年通り。 【合同巡行路】 ※9時頃出発。前年と 同じ。 小修理事業補助金制度発足。	2年前に録音した祇園囃子のテープの 五線譜への記録が始まる(～1974年)。 3月 3日、平凡出版より雑誌『an・an』創 刊。 9日、東海道本線、草津・京都間の 複々線化完成。 14日、大阪万博開幕。 5月 芦刈山・函谷鉾・浄妙山懸想品が国の 重文に指定。 8月 長刀鉾(レプリカ)・菊水鉾・保昌山・ 太子山・白楽天山・浄妙山が大阪万博 お祭り広場に建てられる。 9月 13日、大阪万博閉幕。 10月 14日、国鉄による「ディスカバー・ジャ パン」キャンペーン開始。万博以降も 国内旅行盛んに。 11月 3日、四条通を初めて歩行者天国に。 10日、哲学の道開通。	1月 8日、府立文化芸術会館開館。 2月 16日、京都市議会、社会党・共産党の 反対を押し切り、「府知事六選反対」 決議を可決。 3月 31日、赤軍派学生による「よど号ハイ ジャック事件」が起きる。 4月 12日、社会党・共産党の支援を受けた 蜷川が京都府知事選挙に勝利し6期目 に(民社・公明は対立候補支持)。 10月 21日、国際反戦デーで民青系府学連と 全共関係学生が京大で集会。会場確保 を巡り、双方が乱闘状態に。 11月 25日、三島由紀夫ら民族主義団体「楯 の会」メンバー4名が、自衛隊市ヶ谷駐屯 地にて益田兼利東部方面総監を人質に立 てこもり、自衛隊の決起を呼びかけるも失 敗。三島と側近の森田必勝の2名が割腹 自殺を遂げる(いわゆる「三島事件」)。
1971 (昭和46)	7月	巡行は例年通り。 【合同巡行路】 ※9時頃出発。前年と 同じ。	4月 27日、「京都市電を守る会」が結成。 5月 25日、集英社より雑誌『non-no』創刊。 前年刊行された『an・an』同様に、若 い女性向けの国内旅行特集を掲載。こ れにより、雑誌片手に国内旅行をする 若い女性(アンノン族)が急増。 6月 3日、菊水鉾再建20周年記念祝典が京 都国際会議場で開催。国際会館庭園に 菊水鉾が建てられる。	1月 7日、学内封鎖をしていた大谷大学に 機動隊が突入。この封鎖解除で、京都 における紛争校はなくなる。 2月 24日、京都市長選挙。前年に富井京 都市長が病で倒れたため、社会党・共産 党は前助役の船橋求己を富井の後継者 として推薦し、船橋が初当選。革新市 政が継続となる。 3月 20日、府議会、公害禁止条例を可決。 4月 11日、大阪府知事選挙にて、社会党・ 共産党が支持した黒田一が現職を破 り初当選。同日、東京都知事選挙では 美濃部が勝利し、2期目に入る。 6月 17日、沖縄返還協定調印。
1972 (昭和47)	7月	人力で昇く山がなくなる。 巡行は例年通り。 【合同巡行路】 ※9時頃出発。前年と 同じ。	1月 21日、市電四条・大宮・千本線が廃止。 3月 黒主山町家が全焼。 7月 高原美忠『八坂神社』が学生社より刊 行。	2月 19日、連合赤軍による「あさま山荘事件」 が発生。その後、連合赤軍内で杜絶な 内部粛清が行われていたことが発覚(い わゆる「山岳ベース事件」の発覚)。 5月 15日、沖縄日本復帰。 30日、テルアビブ空港(イスラエル) で日本赤軍銃乱射。 6月 11日、次期首相候補であった田中角栄 (当時・通産相)が「日本列島改造論」 を発表。翌月の自民党総裁選で勝利し、 田中内閣が発足。 9月 25日、日中共同声明に調印。
1973 (昭和48)	7月	綾傘鉾の「棒振り囃子」が復活(1884 以来89年振り)。 巡行は例年通り。 【合同巡行路】 ※9時頃出発。前年と 同じ。	6月 黒主山町会所兼収蔵庫として5階建て ビル建設。 11月 5日、京都市マイカー観光拒否宣言。	1月 27日、パリでベトナム和平協定が調印。 米軍撤退。 7月 5日、共産党が中ソ核実験に反対の意 思を表明。
1974 (昭和49)	7月	巡行は例年通り。 【合同巡行路】 ※9時頃出発。前年と 同じ。	3月 31日、市電烏丸線廃止。 6月 函谷鉾町会所がビル化。 米山俊直「祇園祭 都市人類学とはじ め」が中央公論社より刊行。	4月 7日、社会党本部・共産党の支援を受 けた蜷川が京都府知事選に勝利。7期 目に入る。社会党府連は独自候補の大 橋和孝を支援、自民党なども大橋支援

			9月 久保田取『八坂神社の研究』が神道史学会(出版・臨川書店)より刊行。	9月 13日、オランダのハーグにてフランス大使館を日本赤軍が急襲。大使館員を人質に仲間の釈放と身代金をオランダ政府に要求(いわゆる「ハーグ事件」)。
1975 (昭和50)	7月	巡行は例年通り。 【合同巡行路】 ※9時頃出発。前年と同じ。	7月 京都市美術館で「祇園祭の華一屏風祭展」開催。	1月 17日、亀岡市長選挙で小島幸夫が初当選。京都府下初の共産党員市長に。
			9月 4日、臨時京都市議会で市電・市バス値上げ可決。	2月 16日、社会・共産党に加え自民・公明・民社党など全会派の支援を受け船橋が京都市長選勝利。2期目に。
			10月 13日、京都市電を守る会、臨時京都市議会にて75年度中の市電3線撤廃の付帯決議(9/4付)に抗議し、市電沿線住民決起集会を行う。	4月 13日、統一地方選にて大阪では黒田が府知事選挙に勝利し2期目、東京では美濃部が都知事選挙に勝利し3期目に入る。その他、神奈川では長洲一二が社会党・共産党の支援を受け県知事選初当選。
1976 (昭和51)	7月	巡行は例年通り。 【合同巡行路】 ※9時頃出発。前年と同じ。	1月 8日、京都の市電を守る直接請求運動実行委市電廃止反対直接請求署名27万2千人分を京都市に提出。	2月 16日、衆議院で米国航空機会社ロッキード社による世界的汚職事件(いわゆるロッキード事件)の追窮始まる。
			2月 19日、京都市議会、市電存続直接請求を否決(共産賛成、民社退席)。直接請求実行委、抗議集会開催。	5月 20日、立命館大学でわたつみ像が再建。
			3月 31日、京都市電今出川・丸太町・白川線廃止。船橋市長、正式に市電廃止を宣言。	6月 13日、河野洋平ら自民党所属国会議員6名が離党し、「新自由クラブ」を結成。
			4月 17日、京都市、町並保存地区に清水・安寧坂と祇園新橋の2か所を指定。	7月 2日、南北ベトナム統一(ベトナム社会主義共和国樹立)。 27日、ロッキード事件で田中角栄前首相を逮捕。
			6月 祇園祭編纂委員会・山鉾連合会編『祇園祭』刊行。	12月 5日、第34回総選挙で自民党初の単独過半数割れ。
			7月 田島征彦(絵本)『祇園祭』童心社、刊行。	
			10月 9日、京都市議会、市電の全廃を可決。	
1977 (昭和52)	7月	危険防止のため鉾上からの「粽投げ」を自主規制。 烏丸通の通行ができないため、烏丸御池からくだって各町に帰ることができなくなる。そのため、新町御池をくだって解散することとなり、以降、固定化される。 【合同巡行路】 9時：四条烏丸(西行)→四条河原町(北行)→河原町御池(東行)→新町御池→各町内 有料観覧席も烏丸御池から新町御池まで拡大。	地下鉄烏丸線工事で烏丸通の使用が不可能に。 山鉾連合会が山鉾巡行に総合保険をかけ始める。	3月 26日、社会党所属国会議員の江田三郎が離党。「社会市民連合」を結成(4月18日、京都社会市民連合結成)。
			5月 10日、蹴上インクライン復元。一般公開される。	5月 6日、成田空港反対派の鉄塔が撤去され、機動隊と反対派とが数日にわたり衝突。死者を出す騒ぎに。
			7月 山鉾連合会編の雑誌『山町鉾町』創刊(1991(平成3)年まで28号刊行)。	8月 3日、原水禁世界大会(広島)統一開催(14年振り)。
			9月 30日、京都市電河原町線・七条線など廃止。	18日、新自由クラブ京都結成。
				9月 28日、日本赤軍が日航機をハイジャック。翌29日、犯人側の要求により収監中だった6名の極左活動家が超法規的措置で解放(いわゆるダッカ日航機ハイジャック事件。なお思想上の違いなどを理由に、3名は自ら拒否し獄中に残る)。 同日、社会党離党の田英夫ら「社会クラブ」結成。
1978 (昭和53)	7月	巡行は前年同様。 【合同巡行路】 ※前年と同じ	綾傘鉾・蟷螂山(休み鉾・休み山)の保存会設立。	3月 26日、社会市民連合と社会クラブ、一部の社会党所属議員が離党して新たに「社会民主連合」を結成(5月28日に京都社民連結成)。
			6月 蟷螂山の第1期修理が終わり山鉾で一般公開。	
			7月 山鉾連合会編『写真記録・祇園祭』刊行。	4月 9日、船橋が府知事引退を決定。府知事選挙では自民党推薦の林田悠起夫(前自民党参議院議員)が初当選。船橋の後継候補で共産党が支持した杉村敏正、社会党・公明党・民社党が支持した山田芳治は及ばず。革新府政が終わる。
			9月 30日、京都市電が全廃される。	
			10月 15日、京都市、世界文化自由都市宣言。	
			12月 15日、京都の市電を守る会、解散。	
1979 (昭和54)	7月	綾傘鉾が巡行に復活(95年振り)。山鉾が30基となる。 本数や場所を制限して「粽投げ」が復活。 巡行は前年同様。 【合同巡行路】 ※前年と同じ	2月 3日、祇園祭の山鉾行事が国の重要無形民俗文化財に指定される。	1月 1日、米中間で国交樹立。 16日、同志社大学学友会、田辺キャンパス移転に反対し、ピケを張る。
			10月 19日、全国山鉾・屋台・山車等保存連合会設立。	2月 18日、京都市長選、前回同様全会派が船橋を支持し、三期目に入る(投票率は過去最低)。
				4月 8日、統一地方選。大阪は黒田が保守系の支持を集めた岸昌(前大阪副知事)に敗れ、東京も美濃部の後継候補が自民・公明・民社・新自くの支持を受けた鈴木俊一(元東京副知事)に敗れ革新府政・都政終わる。

1980 (昭和55)	7月	巡行は前年同様。 【合同巡行路】※前年と同じ	7月	郭巨山の支援団体となる郭巨山後援会が設立。 西口克己・田島征彦（絵本）『火の笛』童心社刊行。	8月	22日、ポーランドで独立自主管理労働組合「連帯」設立。
			9月	林屋辰三郎ら10名の講師陣によるリレー講座「講座祇園祭」開講（翌4月まで開講）。	10月	21日、国際反戦デー。京都では5年振りに社会党・共産党・京都総評の三者共闘復活。
			11月	京都駅前地下街「ボルタ」開業。		
1981 (昭和56)	7月	蟻螂山が巡行に復活（117年振り）。山鉦が31基となる。 巡行は前年同様。 【合同巡行路】※前年と同じ		囃子方講習会、笛方講習会が開催される。	5月	6日、船橋京都市長、脳出血で倒れる（7月5日辞任）。
			5月	29日、市営地下鉄烏丸線（京都－北大路間）開業。	7月	30日、初の「平和のための京都の戦争展」開催。
			7月	祇園祭山鉦連合会編『講座記録 祇園祭』刊行（前年から4月までの講座記録を書籍化）。	8月	30日、船橋市長辞任に伴う京都市長選。船橋市政の継承・発展を掲げ、共産・民社・社民連の支持と自民・公明・社会党の推薦を受けた今川正彦（前京都市助役）が新しく推薦の加地和を僅差で破り初当選。
			10月	8日、京都会館第2ホールで合唱組曲『火の笛』で初演。	10月	9日、京都市議会、全国初の空き缶回収条例を可決。
1982 (昭和57)	7月	巡行は前年同様。 【合同巡行路】※前年と同じ		京都府・市援助で祇園祭山鉦染織品新調制度発足。	4月	11日、京都府知事選は自民党などの支持を得た林田が勝利。2期目に入る。
			5月	木賊山が財団法人を設立。	9月	28日、八幡市、府下初の非核平和都市宣言を可決。
			6月	橋弁慶山の黒威肩白胴丸が重要文化財指定。 祇園囃子の採譜集が刊行（市立芸大の片岡義道氏が1967年採録囃子を14年かけて五線譜に記した）。 28日、囃子方70名が集まり、初の祇園囃子研究会が八坂神社で開催される。	12月	14日、全日本民間労働組合協議会（全民労協）が結成。
1983 (昭和58)	7月	鉦上からの「粽投げ」が全面禁止となる。 四条傘鉦が復活（112年振り）。ただし巡行は不参加。 巡行は前年同様。 【合同巡行路】※前年と同じ		電通製作の16フィルム記録映画『重要無形民俗文化財—祇園祭の山鉦行事』がクランクインする。	6月	26日、第13回参議院議員選挙。比例代表制初導入。
			1月	18日、臨時京都市議会にて共産党が審議継続を求め、古都保存協力税が可決。	12月	18日、第37回衆議院総選挙。自民党、再び単独過半数を割り込む。
			2月	14日、京都市仏教会が古都保存協力税の無効確認を求め、京都地裁に提訴。		
1984 (昭和59)	7月	巡行は前年同様。 【合同巡行路】※前年と同じ		京都市社会教育総合センターで「祇園祭展」開催。	2月	26日、反日教組の教職員組合連合体「全日本教職員連盟」（全協連）が結成。
			3月	京都駅前アバンティに長刀鉦（実物大模造鉦）設置。	3月	28日、府教委・市教委、公立高校のいわゆる「高校三原則」見直しを議決。
			6月	6日、京滋バイパス起工。		
			7月	京都青少年活動推進会議が祇園祭のボランティア参加について提唱。山鉦連合会との協議の末、8基長刀鉦・芦刈山・油天神山・郭巨山・浄妙山・保昌山・孟宗山・役行者山）の曳き手に留学生含む314名のボランティア参加が決定。		
			10月	京都伝統工芸博覧会で大船鉦が復元、披露される 祇園祭常設展施設「三井銀行文化財展示室」開室。		
			12月	四条傘鉦の保存会が発足。		
1985 (昭和60)	7月	四条傘鉦が居祭として宵山復活。 巡行は前年同様。 【合同巡行路】※前年と同じ	1月	4日、今川市長、古都保存協力税を4月1日から実施すると宣言。6日後の10日、京都仏教会が実施に踏み切れば対象24寺の拝観を停止すると声明。	4月	1日、電電公社・専売公社が民営化され、NTTと日本たばこ産業（JT）に。
			7月	大丸京都店で「祇園祭山鉦絵図原画展」開催。 10日、京都市が古都保存協力税実施。 18寺院は拝観停止に（第一次拝観停止・8/9に一度和解し、解除）。	5月	17日、男女雇用機会均等法成立（翌4月1日から施行）。
			12月	5日、京都市と京都仏教会とが和解を巡り再び紛糾し、9寺院が拝観停止に（第二次拝観停止）。	8月	25日、京都市長選で自民・公明・民社・社会党の支持を受けた今川が再選、2期目に入る。
					10月	12日、関西文化学術研究都市の起工式が精華町で行われる。

1986 (昭和61)	7月	巡行は前年同様。 【合同巡行路】※前年と同じ		山鉦懸想品類の中でも渡来品の文化財調査が始まる(報告書は1992年刊行)	3月	17日、京都市議会予算特別委で、共産党が19年ぶりに一般予算案に反対。
			3月	30日、一部寺院の拝観停止が解除(約4ヶ月振り)。	4月	6日、府知事選挙。林田知事が参院撰立候補を固め、不出馬の中、自民・公明・社会・民社・新自・社民連が支持した荒巻禎一(前副知事)が初当選。
			5月	太子山保存会と町内新規マンションとで協定書が交わされ、マンション住民も太子山保存会入会が決定。	8月	8日、ゴルバチョフ(ソ連共産党書記長)がベレストロイカ提唱。
			7月	米山俊直京大教授指導のもとで京大・同志社大学生らがおこなってきた祇園祭調査(1983～)の成果を書籍化(米山俊直編『ドキュメント・祇園祭』NHKブックス)。	10月	15日、新自由クラブが解党(9月15日には京都府連解散)。大多数の議員が自民党に復党。
				1日、古都保存協会税を巡り6寺院が拝観停止(第三次拝観停止)。 15日、宵々山で各山鉦町がTシャツなど販売。	12月	26日、京都国立近代美術館が開館。 この頃よりバブル景気が始まる。
1987 (昭和62)	7月	巡行は前年同様。 【合同巡行路】※前年と同じ		3年計画で祇園囃子後継者養成事業を開始。	4月	1日、国鉄が分割、民営化。
			2月	3日、国鉄宮津線の廃止が決定。	5月	3日、朝日新聞阪神支局が襲撃、記者2名が死傷(いわゆる赤報隊事件)。
			5月	1日、10ヶ月振りに拝観停止解除。 24日、京阪本線の東福寺 - 三条間地下鉄線が開業。	11月	21日、国立国際日本文化研究センターが開設。 20日、全労協、民社党系の全日本労働総同盟(同盟)、中間派の中立労働組合連絡会議(中立労連)が合流し、全日本民間労働組合連合会結成。
			10月	17日、市議会、古都保存協力税の年度未廃止可決。		
			12月	8日、市職労が季刊紙『ねっとわーく京都』発刊(後、月刊化)。		
1988 (昭和63)	7月	四条傘鉦が「棒振りばやし」を再興。囃子方なども準備を整え、巡行復活(117年振り)。山鉦が32基となる。 巡行は前年同様。 【合同巡行路】※前年と同じ	2月	地域経済研究所が祇園祭の経済効果を2億4千万円と算出。	4月	24日、舞鶴引揚記念館開館。
			3月	17日、国道9号バイパス、西京 - 亀岡間開通。	6月	18日、リクルート汚職事件発覚。
			4月	31日、古都保存協力税を廃止。	10月	1日、京都府京都文化博物館開館。
			8月	1日、京都市、高さ制限など大幅な規制緩和導入。 29日、京滋バイパス草津 - 久御山間、開通。	12月	24日、消費税導入など税制改革法が可決。
			10月	鞍馬火祭や時代祭が昭和天皇の容体に配慮し中止。		
1989 (平成元)	7月	巡行は前年同様。 【合同巡行路】※前年と同じ		月鉦の囃子を譜面化した「月鉦囃子譜図」完成。	1月	7日、昭和天皇崩御。翌日、平成と改元。
			3月	4日、JR山陰線(嵯峨野線)、嵯峨 - 馬堀間複線電化完成。	2月	17日、全日本民間労働組合連合会京都府連合会結成。
					4月	1日、消費全3%導入。 25日、リクルート事件の責任を取り竹下首相辞任表明。
					6月	4日、中国天安門広場にて民主化を求める学生らデモ隊に人民解放軍が武力弾圧。多数の死傷者が出る(いわゆる六四天安門事件)。 16日、琵琶湖疎水記念館開館。
					7月	第15回参議院議員選挙。自民党過半数割れ。社会党躍進(いわゆる「マドンナ旋風」)。参議院では土井たか子委員長が首相指名(衆議院の優先で自民党の海部俊樹内閣に)。
					8月	27日、京都市長選挙。今川市長引退に伴い、まれにみる接戦となるが、自民支持、公明・民社推薦の田辺朋之(前京都医師会会長)が共産党推薦の木村万平に321票差で勝利。
					11月	21日、総評解散決定。全日本民間労働組合連合会へ合流。 同日、全国労働組合総連合(全労連)結成。
					12月	9日、旧総評左派が全国労働組合連絡協議会(全労協)結成。

〔主要参考文献・URL〕

- ・京都市文化観光局文化課 編『祇園祭一戦後のあゆみ』(京都市文化観光局文化課、1967年)
- ・祇園山鉦連合会 編『写真記録 祇園祭』(祇園山鉦連合会、1978年)
- ・都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課 編『写真でたどる祇園祭山鉦行事の近代』(京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課、2011年)
- ・京都市編『京都の歴史』9 世界の京都(藝林書院、1975年)

- ・京都市編『京都の歴史』10 年表・事典（藝林書院、1975年）
- ・岩井忠熊・藤谷俊雄監修『戦後京都のあゆみ』（かもがわ出版、1988年）
- ・井ヶ田良治・原田久美子編『京都府の百年』（山川出版社、1993年）
- ・朝尾直弘・吉川真司・石川登志雄・水本邦彦・飯塚一幸『京都府の歴史』（山川出版社、1999年）
- ・花森重行「国民的歴史学運動における政治の多様性—民科京都支部歴史部会の紙芝居『祇園祭』に即して」『新しい歴史学のために』（275号、2009年）
- ・伊藤節子「1956年の祇園祭山鉦巡行路の変更に関する考察—京都市の政策動向に着目して—」『日本建築学会計画系論文集』75（658）、2010年
- ・田中聡「映画『祇園祭』の構想をめぐる対立—『キネマ旬報』誌上の論争から—」『京都戦後史学史研究会 研究成果報告書』2015年
- ・公益社団法人京都勤労者学園 ラボール学園HP 京都戦後労働運動年表 <http://www.labor.or.jp/gakuen/history/index.htm>（最終閲覧：2015年9月30日）

【別紙3】 合唱組曲「火の笛」(京都うたごえ協議会・作)

解説：ひらのりょうこ

作詞：「火の笛」創作グループ(ひらのりょうこ、安田義明、松内茂)

序

【解説】

灰色にくすむ京の町。月の光をぬって、ひびく一管(いっかく)の笛。

河原者が吹くその笛は、やがて、火の笛となり、男と女の心をむすび、多くの人々をつないでいった。

長い戦にくたびれ果てた人々は、ゆっくりと絶望のなかからたちあがっていった。人々は集まり、そのちからは、一つの目的にむかって、急速にふくらんでいった。

これは、あくない権力の妨害をはねのけて、とだえていたぎおん祭を復活させた人々の物語である。

1、月に舞う

【解説】

室町時代、足利將軍の権力争いにはじまった応仁の乱は11年もつづいた。この戦で、京の町はことごとく戦火に荒れ、人々は血にまみれた。生きのこった人はだれも家を焼かれ、親きょうだい、いとしい人を失った。

戦のきずあとは10年、20年、50年たっても癒えず、貧しさと病気がつづいた。

人々——町衆、河原者、百姓——はたがいにさげすんだり、いがみ合ったりしていた。

町では

一期は夢よ、ただ狂え……

そんな歌がはやり、暗い気持ちを晴らそうと、人々は念仏踊りを踊るのであった。

【歌詞】(作曲：河合正雄)

戦するより 月の光に舞い踊れ / 疲れはてた人々よ / 戦するより 灰色の町に舞い踊れ / なにしようぞくすんで / 一期は夢よ  
ただ狂え

2、石を拾う

【解説】

“河原者”と呼ばれる人たちがいた。

身分差別に苦しめられ、石ころのように足げにされてきた人たちは、しかし、多くの美しい仕事をやりとげている。

銀閣寺の庭もその一つであった。

戦火の血にまみれた町から、美しい石を選りすぐって、拾い集め、庭師たちは、石を積み、銀の庭をつくっていく——

【歌詞】(作曲：早見公夫)

石を拾う 石を積み / さげすまれてきた河原者 / 石を拾う 石を積み / さげすまれてきた河原者 / 石を積み

長い戦で血にそまり / 虐げられた石たちの / 呻き 叫び

声のきこゆる 鴨川の / 流れの底から / 銀の庭に石を積み

京の街 木漏れ陽 いぶし銀 / 静寂の世界に ひとすじひびく笛

石を拾う 石を積み

3、炎

【解説】

百姓はきびしい年貢のとりたてにいじめられていた。幕府は百姓の声に耳を貸さない。食うに困った彼らは山科を根拠地として、一揆をおこし、度々、都へなだれこんだ。金持ちの倉をおそい、火を放った。町は火の海をなつた。

この一揆のとぼちりを受けた町衆は、百姓を憎んだ。そして、彼らは武器を集め、百姓に仕返しをするため、山科へ攻めこんだのである。

百姓と町衆の殺し合いにほくそえむ者がいた。

幕府であった。

【歌詞】(作曲：林保雄)

飢えた百姓 一揆をおこす / 町をおそい 火をはなつ / 誰にむかって 誰にむかって

焼かれた町衆 武器を手に / 村をせめて 人を殺す / 誰にむかって 誰にむかって

百姓が町衆を殺す / 町衆が百姓を殺す / ほくそえむ武士

河原者は笛をふく / 火のように笛をふく

町も村も焼きつくされ / 灰の中から ひびく / それは火の笛

殺された百姓が歌いだす / 殺された町衆が歌いだす / ウー ウー

#### 4、火の調

##### 【解説】

しかし、やがて町衆と百姓は、自分たちの無駄な争いに気づきはじめた。商いをする町衆もまた、高い税金に苦しんでいたのである。自分たちをいじているのは幕府ではないか——人々は、手をつなぎはじめた。

もとはといえば、人はみな、同じ人間なのだ。河原者もつるめそも、百姓も町衆も。

そして、ここに、火のように燃える恋がうまれた。

##### 【歌詞】（作曲：玉村信雄）

若者の からだをつらぬく / 一筋 燃える 笛の音 / 若者の 心をこがす / 白い炎  
いとしいあなたは京の町衆 / あたしはいやしい河原者  
もうはなさない / 白い炎よ / この腕の中で 舞え 踊れ  
二人をへだてる暗闇を / 切り裂いて / 炎の女の舞い踊り / 生命のかぎりの 火の調

#### 5、もしもまだ

##### 【解説】

百姓は町へきて野菜を売り、近江の馬借は米や魚をはこんできた。

町衆は商いにはげみ、人々は声をかわし合うようになってきた。すこしづつ（ママ）、たがいの心をひらき、みんな、元気をとり戻していった。

人々は考えはじめた。

町衆も河原者も百姓も、つるめそ、馬借、すべての人たちが、いま、しっかりと手を取り合わないと、また、京の町は、侍（さむらい）たちのほしいままに、戦にひきずりこまれるかもしれない……

##### 【歌詞】（作曲：千秋次郎）

焼けただれた町に / 白い花が咲いたとき / 名もない白い花は美しい / 汚れない白い花は美しい  
もしもまだ / 愛する心があるならば / もしもまだ / 哀しみの心があるならば  
疲れはてた町に / 白い花が咲いたとき / 名もない白い花は美しい / 汚れない白い花は美しい  
もしもまだ / 信じる心があるならば / もしもまだ / わかちあう心があるならば  
もしもまだ それを望むなら / 炎でかわいた心にも / 白い花は咲くだろう

#### 6、祇園祭

##### 【解説】

みんなの心がひとつになるには……

そうだ、祭だ。ぎおん祭だ。戦より京の町には祭が似合う。

京の町にぎおん祭をよみがえらせよう。もう二度と、戦をさせないためにも……

こんな人々の願いをふみにじり、将軍家から、突然、「祭、中止」の命が下った。

しかし、人々は—

##### 【歌詞】（作曲：山口良介）

鉦をつくろう / 鉦をつくろう  
糸をはれ 墨をひけ / 縄をなえ 墨をひけ / 縄をなえ 木を組め / 屋根をあげろ / 土にめりこむ車をつくろう  
祭りのはやしを あ火の笛で / コンコンチキチン コンチキチン / 「長刀をあげろ！」 / つゆ空の天をついて / コンコンチキチン コンチキチン / 祭りのはやしを 火の笛で / エン ヤラ ヤー

（注）

1. 解説、歌詞ともに音楽家・山本忠生氏による提供。山本氏は、京都うたごえ協議会員で、当時は協議会専従スタッフとして組曲の構想から携わっていたという。
2. 山本氏から提供された資料では、歌詞と解説は別刷りプリントであったが、便宜上、併記した。なお、他に楽譜（歌詞付）のプリントもある。